

白
河
街
区
跡

— 聖護院山王町における埋蔵文化財発掘調査報告書 —

白 河 街 区 跡

— 聖護院山王町における埋蔵文化財発掘調査報告書 —

株
式
会
社
イ
ビ
ソ
ク

株式会社 イビソク

白河街区跡

—聖護院山王町における埋蔵文化財発掘調査報告書—

株式会社 イビソク

例 言

1. 本書は京都府京都市左京区聖護院山王町5ほかに所在する白河街区跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、文化財保護法第93条第1項に基づき平成29年4月5日付けで届出された土木工事に伴い、平成29年4月17日に京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課が試掘調査を実施した結果、白河街区跡に関連する遺構が検出されたため、同課により発掘調査の実施が指示されたものである。[京都市番号17S013]
3. 本調査は、集合住宅新築工事に伴う事前調査として、株式会社創生（代表取締役 長石久永）の委託を受けた株式会社イビソクが実施した。
4. 発掘調査は、平成29年7月3日から平成29年9月5日にかけて実施した。
5. 発掘調査は、京都府教育庁指導部文化財保護課、および京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課の指導・助言の下、株式会社イビソクが実施した。
6. 発掘調査は次の体制で行った。

調査主体 株式会社イビソク
調査員 石井明日香
計測員 伊藤雅哉
7. 本報告書の編集は、小池智美が行った。
8. 本報告書の執筆分担は、以下の通りである。

第1章 石井、第2章 小池、第3章 石井、第4章 小池、第5章 石井
9. 本報告書では次に示した地図を調整・使用している。

都市計画基本図（1：2,500）「御所」「吉田」京都市都市計画局発行
10. 本報告書で使用している白河街区復元図は、『平安京提要』（角川書店1994）より引用し、一部改編して作成した。
11. 本報告書で示す方位・座標は、国土座標第VI系（世界測地系）、水準値は東京湾平均海面（T.P.）に基づく数値である。
12. 本報告書に掲載した写真は、遺構写真を石井が、遺物写真を横山亮（オフィスメガネ）が撮影した。
13. 報告書作成にあたり、下記の方々及び関係機関のご指導、ご協力を得ることができた。

伊藤敦史、柏田有香（五十音順／敬称略）
京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課、聖護院山王町の方々、聖護院門跡
14. 出土遺物については、関連する図面・写真等の記録類と共に、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課にて保管している。

凡 例

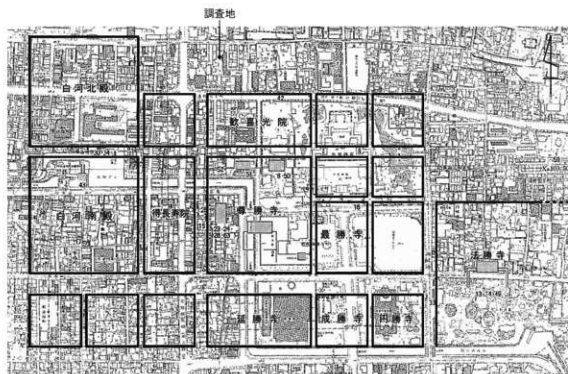
1. 遺構・遺物写真の縮尺は任意である。
2. 遺構番号は各調査面の番号を頭一桁に付し、検出順に通し番号を後ろ三桁に割り当てた。その後、編集段階で遺構の性格を付与して表記した。
3. 遺構の計測値は、残存値に () を付けて表記した。
4. 表で示した出土遺物の計測値は、残存値に []、復元値に () を付けて表記した。
5. 本報告書で用いた土色は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』を使用した。
6. 出土遺物の年代は、下記の分類・編年を基調とした。
 - ・小森俊寛 2005『京から出土する土器の編年の研究—日本律令的土器様式の成立と展開、7世紀～19世紀—』京都編集工房
 - ・中世土器研究会編 1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
 - ・寺沢 薫・森岡秀人編 1990『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅱ』木耳社

第1表 平安京土器型式—年代対応表

(長岡京)

調査面	平安時代				鎌倉時代		室町時代				徳川時代			
730頃	800頃	900頃	1000頃	1090～90頃	1300頃	1520頃	1300頃	1440頃	1500頃	156～90頃	1600頃	1700年代頃	1820年代頃	
京都I	京都II	京都III	京都IV	京都V	京都VI	京都VII	京都VIII	京都IX	京都X	京都XI	京都XII	京都XIII	京都XIV	
占	新	占	新	占	新	占	新	占	新	占	新	占	新	
占	新	占	新	占	新	占	新	占	新	占	新	占	新	

(小森 2005 に基づいて作成)



第1図 白河街区復元図と調査地の位置

目 次

例言・凡例

目次・挿図目次・表目次・図版目次

第1章 調査の経緯	1
第1節 調査に至る経緯	
第2節 調査の経過	
第2章 位置と環境	3
第3章 遺 構	7
第1節 基本層序	
第2節 遺構の概要	
第3節 第1遺構面検出の遺構	
第4節 第2遺構面検出の遺構	
第5節 第3遺構面検出の遺構	
第4章 遺 物	23
第1節 遺物の概要	
第2節 第1遺構面出土遺物	
第3節 第2遺構面出土遺物	
第4節 第3遺構面出土遺物	
第5章 まとめ	36
第1節 各時代の遺構変遷	
第2節 白河街区の地割について	
第3節 山王社と聖護院の森について	
出土遺物観察表	
写真図版	
報告書抄録	

挿 図 目 次

第1図	白河街区復元図と調査地の位置	
第2図	調査地位置図 (縮尺1/2, 500)	1
第3図	調査前全景	2
第4図	調査区配置図 (縮尺1/500)	2
第5図	周辺調査位置図 (1/5, 000)	3
第6図	調査区北壁・南壁壁面図 (縮尺1/100)	8
第7図	第1遺構面全体図 (縮尺1/150)	9
第8図	第2遺構面全体図 (縮尺1/150)	10
第9図	第3遺構面全体図 (縮尺1/150)	11
第10図	第1遺構面遺構図1 (縮尺1/50)	13
第11図	第1遺構面遺構図2 (縮尺1/50)	14
第12図	第1遺構面遺構図3 (縮尺1/80)	15
第13図	第2遺構面遺構図1 (縮尺1/50、ピット2031は1/30)	17
第14図	第2遺構面遺構図2 (縮尺1/80)	18
第15図	第2遺構面遺構図3 (縮尺1/50)	19
第16図	第3遺構面遺構図1 (縮尺1/50)	21
第17図	第3遺構面遺構図2 (縮尺1/80)	22
第18図	第1遺構面出土遺物実測図1 (縮尺1/4)	25
第19図	第1遺構面出土遺物実測図2 (縮尺1/4)	26
第20図	第2遺構面出土遺物実測図1 (縮尺1/4)	28
第21図	第2遺構面出土遺物実測図2 (縮尺1/4)	30
第22図	第2遺構面出土遺物実測図3 (縮尺1/4)	31
第23図	第2遺構面出土遺物実測図4 (縮尺1/4)	33
第24図	第3遺構面・包含層出土遺物実測図 (縮尺1/4)	35
第25図	主要遺構変遷図	38
第26図	溝1042・1055検出状況 (北から)	39
第27図	調査地周辺航空写真	42

表 目 次

第1表	平安京土器型式一年代対応表	4
第2表	周辺調査地一覧	4
第3表	遺構概要表	7
第4表	遺物概要表	23
第5表	白河・岡崎地区における時代変遷	36
第6表	出土遺物観察表	45

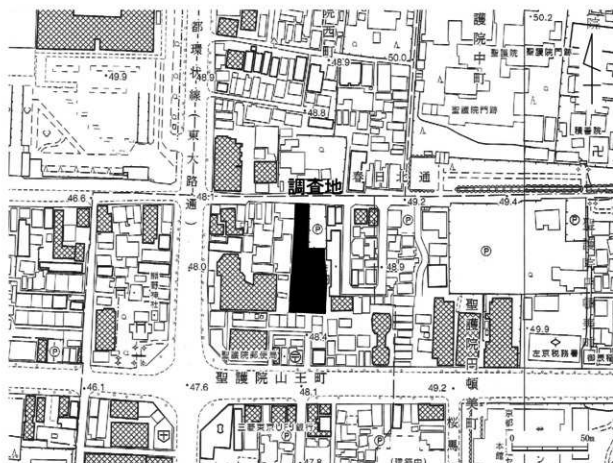
図 版 目 次

図版一	1. 第1遺構面全景（南から）	図版一一	1. 第1遺構面出土遺物1
	2. 柵1検出（西から）	図版一二	1. 第1遺構面出土遺物2
	3. 土坑1005遺物出土状況（南から）	図版一三	1. 第2遺構面出土遺物1
	4. 土坑1017遺物出土状況（西から）	図版一四	1. 第2遺構面出土遺物2
図版二	1. 溝1040、石列1054完掘（南から）	図版一五	1. 第2遺構面出土遺物3
	2. 集石遺構1012断面（東から）	図版一六	1. 第2遺構面出土遺物4
	3. 集石遺構1033検出（東から）	図版一七	1. 第2・第3遺構面出土遺物
	4. 集石遺構1013断面（東から）	図版一八	1. 包含層出土遺物
	5. 井戸1022断面（東から）		
図版三	1. 第2遺構面全景（南から）		
	2. 土坑2031遺物出土状況（北から）		
図版四	1. 土坑2079遺物出土状況（北から）		
	2. 土坑2086下層集石検出（南から）		
図版五	1. 土坑2091完掘（東から）		
	2. 土坑2092完掘（北から）		
図版六	1. 溝2085完掘（北から）		
	2. 溝2119完掘（南から）		
図版七	1. 溝2085・2119、塀1完掘（南から）		
	2. 柵2完掘（南から）		
図版八	1. 第3遺構面全景（南から）		
	2. 土坑3019断面（南から）		
図版九	1. 土坑3045完掘（西から）		
	2. 土坑3078完掘（南西から）		
図版十	1. 井戸3040完掘（西から）		
	2. 流路3015（北西から）		

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

調査は集合住宅建設に伴う発掘調査である。調査地は、京都市左京区聖護院山王町5ほか（に所在する、白河街区跡（遺跡番号417）である。当該地において、株式会社創生により集合住宅が建設されることになり、同社は京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下、「文化財保護課」という）へ、平成29年4月5日付で文化財保護法第93条第1項に基づく届出を行った。京都市文化財保護課はこれを受け、平成29年4月17日に試掘調査を実施したところ、当該地に江戸時代以前の遺物包含層と遺構が残存していることが確認された（受付番号17S013）。そのため京都市文化財保護課から発掘調査の指導があり、調査については、株式会社創生から発掘調査の委託を受けた株式会社イビソクが実施することになった。株式会社イビソクは、文化財保護法92条に基づき京都市教育委員会に埋蔵文化財発掘調査の届出をし、許可されたので平成29年7月3日より調査を開始した。



第2図 調査地位置図（縮尺1/2,500）

第2節 調査の経過

発掘調査は、平成29年7月3日から平成29年9月4日まで実施した。京都市文化財保護課の指導・監督の下、試掘調査の結果に基づいて調査区域を設定した(第4図)。調査面積は304㎡である。調査は、バックホウによる近代以降の堆積層の除去作業と並行して、攪乱の除去を行った。機械掘削の後、精査して遺構検出を行った。第1遺構面は、一部近世遺構を含む、鎌倉時代から室町時代を中心とした中世の遺構面、第2遺構面は平安時代後期から鎌倉時代前期、第3遺構面は平安時代後期の遺構と弥生時代の旧流路を確認した。それぞれの遺構面の検出時と完掘時には、京都市文化財保護課の検査を受けた。

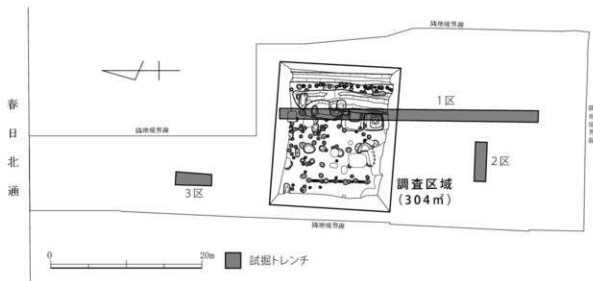
遺構検出と並行して、遺構配置図を作成し、遺構の配置や重複する遺構の前後関係等の把握に努めた。遺構の記録作業は、土層断面図などを手実測で行い、必要に応じてトータルステーションを用いて遺構平面測量を行い図化した。また、各遺構の情報(種類・位置・成果等)及び作業状況を記述した台帳を作成した。なお、遺構の位置関係の把握と遺物の取り上げのために調査区に合わせて東西方向に西から1から4、南北方向にAからDまでの5mグリッドを設定した。

遺構土層断面図と遺物実測図は、デジタルトレースを行い、現場計測図面と合わせて編集を行った。編集に伴って、各遺構を検討し、遺構の性格を判断していった。

出土した遺物は、洗浄、注記、接合の後にランク分けを行い、実測対象遺物を抽出した。報告書掲載遺物は、掲載順にコンテナに収納し、非掲載遺物は、遺構番号順にコンテナに収納した。



第3図 調査前全景



第4図 調査区配置図(縮尺1/500)

第2章 位置と環境

調査地は平安神宮の北西にあたり、聖護院門跡とは春日北通を挟んで南西に位置する。また、調査地は白川の氾濫原でもある。白川は、比叡山と如意ヶ岳の間に発し、鹿ヶ谷を南流して鴨川に注ぐ川で、現在は四条通で鴨川に合流するが、近世以前は三条通の北を西流して鴨川に合流していた。流域一帯が花崗岩地帯であるため、川砂が白色であることから白川の名称となり、平安時代には清流として歌に詠まれている（『古今和歌集』平貞文）。

白河街区跡は、六勝寺と白河上皇の院御所としての白河南殿（1095年）や白河北殿（1118年）を中心として平安時代後期のいわゆる院政期に整備された、鴨川東側を中心とした地域の総称である。街区は二条大路末の東の突き当りに創建された六勝寺筆頭寺院の法勝寺（1077年、白河天皇御願寺）、尊勝寺（1102年、堀河天皇御願寺）、最勝寺（1118年、鳥羽天皇御願寺）、円勝寺（1128年、鳥羽天皇中宮待賢門院御願寺）、成勝寺（1139年、崇徳天皇御願寺）、延勝寺（1149年、近衛天皇御願寺）があり、全ての寺名に「勝」の字があることから六勝寺と称されている。



第5図 周辺調査位置図 (1/5,000)

なお白河街区跡は藤原良房が藤原家累代の別業（別荘）として9世紀中期から築いた白河第の敷地であった。ここには寝殿、北の対、西南渡殿、西北渡殿、釣殿、馬場殿といった諸殿舎や苑池が存在したといひ、天皇や公卿を招いて観桜の宴を開いており、桜の名所として知られていた。この第が藤原師実所有の時に白河天皇に献上され、法勝寺の造営が始まる。

調査地は白河街区推定区域の北西寄りに位置し、特定の寺院や御所には比定されていないが、南に歓喜光院があり、北に中御門大路末、西側に白河街区の南北の幹線道路である今朱雀が通るため、白河街区の地区割りに関連する遺構の検出が期待された。

応仁の乱で多くの寺院や宅地が焼失し、その後の白河街区の区域は長く田畑として利用されることとなった。江戸時代後期には大名藩邸用地となり、周囲に加賀前田家屋敷、越前松平屋敷などが建ち並び、調査地は彦根井伊屋敷の北端にあたる。

調査地には発掘調査の前は「聖護院山王町」の町名の由来になった山王社が祀られていた。境内には親覺上人にまつわる伝承をもつ樹齢600年以上というカヤのご神木があり、山王社信仰の歴史の長さを伝えていた。ご神木は腐朽のため伐採されたが、山王社は聖護院門跡境内に移され、現在も地元住民の篤い信仰を集めている。

第2表 周辺調査地一覧

番号	遺跡名	調査	概要	文献
1	尊勝寺跡	発掘	平安時代後期の建物跡、近世の土坑検出。平安時代後期の土器・瓦類を中心に、縄文時代の石器、古墳時代の須恵器などが出土。	『昭和52年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所
2	丹長寿院跡	発掘	中世～近世の溝・柱穴、平安～鎌倉時代の溝・配石・移り・井戸状遺構・土坑、弥生時代の方形周溝墓を検出。	『昭和52年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所
3	尊勝寺跡	発掘	12世紀初頭～中頃の建物跡を検出。平安時代後期～鎌倉時代の瓦などが出土。	『昭和53年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所
4	尊勝寺跡	発掘	12世紀初頭～中頃の建物跡、築地市落溝を検出。	『昭和53年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所
5	尊勝寺跡	発掘	建物跡、市落溝を検出。	『昭和55年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所
6	尊勝寺跡	発掘	建物跡、市落溝を検出。	『昭和55年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所
7	白河北院跡	発掘	平安時代後期の建物基礎・溝、鎌倉時代の建物跡・土坑・溝、室町時代の集石・土器跡・土坑を検出。平安時代後期～鎌倉～室町時代の土器・瓦類・鉄製品などが出土。	『昭和55年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所
8	白河北院跡	発掘	平安時代後期の建物基礎、鎌倉～室町時代の道路状遺構、落ち込みを検出。平安時代後期～鎌倉時代の瓦などが出土。	『昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所
9	最勝寺跡	発掘	現地表下40～80cmまで現代遺構。	『昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所
10	尊勝寺跡	発掘	弥生時代中期の方形周溝墓4基、平安時代中期の土坑、平安時代後期～鎌倉時代の建物跡・井戸・溝・土坑・溝・柱穴、室町時代の土坑4基を検出。弥生時代の豪・埴・磨製石剣、平安～室町時代の土器跡・須恵器・黒色土器、緑釉陶器・反釉陶器・瓦器・輸入陶器跡・陶器・鉄貨・金属製品・石製品、瓦などが出土。	『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所
11	尊勝寺跡	発掘	弥生時代の方形周溝墓、平安時代中期のビッド、平安時代後期の井戸、平安時代後期～鎌倉時代前半の溝・ビッド、室町時代の土器墓などを検出。弥生時代中期の豪・埴、平安時代中期の土器跡・須恵器・黒色土器、緑釉陶器・反釉陶器・瓦、平安時代後期～鎌倉時代前半の土器跡・須恵器・瓦器・陶器・輸入陶器跡・瓦・石製品・金属製品・鉄貨、室町時代の土器跡・金属製品などが出土。	『昭和58年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所
12	尊勝寺跡	発掘	調査区内の広範囲で平安時代後期の版築を検出。版築下層で成層を検出。平安時代後期の瓦・平安時代の土器跡・反釉陶器、古墳時代の須恵器などが出土。	『昭和59年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所

番号	遺跡名	調査	概要	文献
13	白河街区路	立会	平安時代後期の瓦を多量に含む遺物包含層。	『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所
14	尊勝寺跡	発掘	弥生～古墳時代の浅路。平安時代後期の建物・溝、鎌倉時代の土・瓦類などを検出。平安時代後期の瓦が多量に出土。緑釉土器1点出土。	『昭和61年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所
15	尊勝寺跡	発掘	11～12世紀の地層。平安時代～鎌倉時代の溝・建物跡などを検出。多量の瓦類、少量の土器類が出土。	『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所
16	尊勝寺跡・岡崎遺跡	試掘	平安時代の整地層。中世の瓦類などを検出。平安時代の瓦類などが出土。	『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所
17	最勝寺跡・岡崎遺跡	試掘	弥生～古墳時代の溝。平安時代の整地層・溝などを検出。	『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所
18	尊勝寺跡・岡崎遺跡	発掘	弥生～古墳時代の帯込。平安時代の整地層・瓦類・土灰・柱穴などを検出。平安時代後期の瓦類、弥生土器、石器。古墳時代の土器類・須恵器。平安時代の土器類・緑釉土器などが出土。	『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所
19	尊勝寺跡・岡崎遺跡	発掘	平安時代の建物・雨溝・帯込地層などを検出。平安時代後期の瓦類などが出土。	『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所
20	最勝寺跡・岡崎遺跡	発掘	庄内式期の自然露堀。古墳時代の古墳奥溝。平安時代後期の地層・溝などを検出した。調文土器・石器。古墳時代前期の土器類。平安時代後期の瓦などが出土。	『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所
21	白河街区路(吉田宮御道跡)	発掘	中世の土灰・ビット・溝等を検出。	『埋蔵文化財発掘調査概報(1978)』京都府教育委員会
22	白河街区路	発掘	方形溝溝底。平安時代前期の産廃土坑。平安時代後期の建物地層・土灰などを検出。庄内式土器。平安時代前期の土器類・鉄製品。平安時代後期の土器類などが出土。	『平成6年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所
23	六勝寺跡・岡崎遺跡	立会	古墳時代の浅路。平安時代後期の建物・基礎・細溝・雨溝溝・瓦類・整地層・土灰。江戸時代の溝列・石列・溝・井戸・瓦類・土灰・整地層などを検出。弥生時代の石器。古墳時代の土器類。平安時代後期の瓦類・土器類・緑釉土器。江戸時代の瓦類・土器類・土製品などが出土。	『平成7年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所
24	六勝寺跡・岡崎遺跡	立会	平安時代後期の瓦類を検出。平安時代後期の瓦類などが出土。	『平成8年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所
25	六勝寺跡	試掘	弥生時代の遺物包含層。平安時代の路面と考えられる遺構・土灰を検出。弥生時代後期の土器。平安時代の瓦などが出土。	『平成8年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所
26	白河街区路・岡崎遺跡	発掘	平安時代後期の土灰を検出。古墳時代前期の土器類。平安時代後期の瓦・土器類などが出土。	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2004-17『白河街区路・岡崎遺跡』財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
27	尊勝寺跡	発掘	建物。瓦類などを検出。瓦類などが出土。	『尊勝寺跡発掘調査報告』1973 六勝寺研究会
28	尊勝寺跡	発掘	平安時代の建物・瓦類・土灰などを検出。大量の瓦類・少量の土器類が出土。	『京都市遺跡調査概報 第23冊(財)京都市埋蔵文化財調査研究センター』
29	尊勝寺跡	立会	No.1 地表下1.03m以下、路面2。No.4 -0.84mで路面。-1.04mで路面に伴う溝。路面は尊勝寺の北側の道路。	『京都市内遺跡立会調査概報』平成8年度 京都市文化市民局
30	尊勝寺跡	立会	No.1 地表下0.77m以下、中世の包含層。No.2 -1.02mで鎌倉の包含層。時期不明の落ち込み。No.4 -1.1mで褐色細砂の無遺物層を切った平安後期～鎌倉の東西遺構。No.7地点でも確認。	『京都市内遺跡立会調査概報』平成8年度 京都市文化市民局
31	尊勝寺跡	立会	平安時代後期の雨溝溝1条。瓦類2基。時期不明の落ち込み2基。土灰状溝溝2基を検出。平安時代後期の瓦・土器類。室町時代の土器類が出土。	『平成8年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所
32	尊勝寺跡	発掘	建物・溝・井戸などを検出。平安時代後期の瓦多量・土製円筒・磁器・瓦器・土器類・種子類。平安時代以前の石器・須恵器などが出土。	『尊勝寺跡発掘調査報告』『奈良国立文化財研究所学術第十冊 平城宮跡第一次伝馬島板蓋宮跡 発掘調査報告』奈良国立文化財研究所 1961
33	白河街区路・岡崎遺跡	発掘	弥生時代の方形溝溝渠。平安時代末期の整地・柱穴。江戸時代以降の溝などを検出。銅剣文軒平瓦。巴文軒丸瓦が大量に出土。	『イビツク京都市内遺跡調査報告第5編 白河街区路・岡崎遺跡』2013年 株式会社イビツク
34	白河街区路・尊勝寺跡・岡崎遺跡	発掘	江戸時代以降の溝を検出。平安時代後期の尊勝寺河阿弥院の礎石付穴付・雨溝ら溝・基石の抜き取れを検出。河阿弥院の南限を確認した。弥生時代の方形溝溝渠・陥穴建物・水田跡とみられる区画溝を検出。	『イビツク京都市内遺跡調査報告第12編 白河街区路・尊勝寺跡・岡崎遺跡』2015年 株式会社イビツク
35	聖護院川原町遺跡(京都大学病院構内遺跡)	発掘	江戸時代の溝・井戸・築石溝溝。平安～鎌倉時代の溝などを検出。	『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和52年度』京都大学埋蔵文化財研究センター
36	聖護院川原町遺跡(京都大学病院構内遺跡)	発掘	近世の溝・井戸・野巻などを検出。調文土器・蓮月地などが出土。	『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和59年度』京都大学埋蔵文化財研究センター
37	聖護院川原町遺跡(京都大学病院構内遺跡)	発掘	中世の井戸。近世の土器穴などを検出。	『京都大学構内遺跡調査研究年報 1986年度』京都大学埋蔵文化財研究センター
38	聖護院川原町遺跡(京都大学病院構内遺跡)	発掘	中世の井戸。近世の土器穴などを検出。	『京都大学構内遺跡調査研究年報 1986年度』京都大学埋蔵文化財研究センター

番号	遺跡名	調査	概要	文献
39	聖護院川原町遺跡(京都大学病院構内遺跡)	発掘	中世の土坑・溝などを検出。	『京都大学構内遺跡調査研究年報 1989～1991年度』京都大学埋蔵文化財研究センター
40	聖護院川原町遺跡(京都大学病院構内遺跡)	発掘	縄文時代の流路、弥生時代の流路、中世の井戸、近世の大溝などを検出。縄文土器、弥生土器、土師器、蓮井筒などが出土。	『京都大学構内遺跡調査研究年報 1996年度』京都大学埋蔵文化財研究センター
41	聖護院川原町遺跡(京都大学病院構内遺跡)	発掘	近世の池・土坑などを検出。	『京都大学構内遺跡調査研究年報 1996年度』京都大学埋蔵文化財研究センター
42	聖護院川原町遺跡(京都大学病院構内遺跡)	発掘	中世の井戸・土坑などを検出。縄文土器・土師器・陶磁器などが出土。	『京都大学構内遺跡調査研究年報 1999年度』京都大学埋蔵文化財研究センター
43	聖護院川原町遺跡(京都大学病院構内遺跡)	発掘	縄文時代の流路、古代の土坑、中世の井戸、近世の井戸・土坑・池などを検出。縄文土器、土師器、近世陶磁器、瓦などが出土。	『京都大学構内遺跡調査研究年報 2002年度』京都大学埋蔵文化財研究センター
44	聖護院川原町遺跡(京都大学病院構内遺跡)	発掘	中世の井戸、近世の井戸・塀・土坑・石垣などを検出。縄文土器、土師器、陶磁器、瓦などが出土。	『京都大学構内遺跡調査研究年報 2007年度』京都大学埋蔵文化財研究センター
45	聖護院川原町遺跡(京都大学病院構内遺跡)	発掘	中世の土坑・溝、近世の塀・野垂・塀・土坑・溝などを検出。縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦、陶磁器などが出土。	『京都大学構内遺跡調査研究年報 2010年度』京都大学埋蔵文化財研究センター
46	聖護院川原町遺跡(京都大学病院構内遺跡)	発掘	近世の段差・溝・井戸・小穴などを検出。	『京都大学構内遺跡調査研究年報 2013年度』京都大学埋蔵文化財研究センター
47	聖護院川原町遺跡(京都大学病院構内遺跡)	発掘	中世の土取り穴、近世の土坑・土取り穴・溝などを検出。縄文時代(早期、中期～晩期)などが出土。	『京都大学構内遺跡調査研究年報 2016年度』京都大学埋蔵文化財研究センター
48	白河北館	試掘	溝などを検出。土師器、瓦、陶磁器などが出土。	『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和53年度』京都大学埋蔵文化財研究センター
49	白河街区路・吉田上大路町遺跡	発掘	鎌倉時代後期～室町時代前期の敷地境界とみられる集石遺構や、礎や土物が大量に入られた土坑などを検出。寺院または宅地と推定。縄文土器、弥生土器、古墳時代の須恵器などが出土。	『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2011-3「白河街区路・吉田上大路町遺跡」財団法人京都市埋蔵文化財研究所』
50	白河街区路(吉田近衛町遺跡)	発掘	鎌倉時代の孤立柱建物、鎌倉時代～室町時代前期の墓・井戸等を検出。	『京都文化博物館調査研究報告第4集 吉田近衛町遺跡』1989年 財団法人京都市文化財団
51	白河街区路・吉田上大路町遺跡	発掘	鎌倉時代～室町時代の柱列・孤立柱建物・柱穴・溝・土坑・墓などを検出。鎌倉時代の墓域を確認した。	『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2016-12「白河街区路・吉田上大路町遺跡」財団法人京都市埋蔵文化財研究所』
52	福徳院跡	発掘	鎌倉時代の溝・柱穴、室町時代の溝・土坑・井戸などを検出。	『昭和36年度 京都市埋蔵文化財調査概要(発掘調査編)』財団法人京都市埋蔵文化財研究所
53	白河街区路	立会	縄文時代後期の土坑、室町時代の土坑・柱穴などを検出。縄文時代後期の土器・石器などが出土。	『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所
54	白河街区路・岡崎遺跡	発掘	古墳時代後期の土坑、平安時代～鎌倉時代初期の井戸・土坑・溝、白河街区の区画溝、室町時代後期の建物跡・塀・井戸・土坑などを検出。	『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2005-4「白河街区路・岡崎遺跡」財団法人京都市埋蔵文化財研究所』
55	白河街区路・岡崎遺跡	発掘	平安時代～鎌倉時代の池・溝・土坑などを検出。	『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2001-14「白河街区路・岡崎遺跡」財団法人京都市埋蔵文化財研究所』
56	法勝寺跡	発掘	平安時代の土坑、室町時代の溝・土坑・柱穴、江戸時代の溝・土坑などを検出。	『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2007-9「法勝寺跡」財団法人京都市埋蔵文化財研究所』
57	法勝寺跡	発掘	古墳時代前期の孤立柱建物、平安時代前期～中期の溝、平安時代～室町時代の池などを検出。	『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所
58	法勝寺跡	発掘	法勝寺金堂回廊の関する遺構を検出。	『昭和61年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所
59	白河街区路・岡崎遺跡	発掘	平安時代後期の南北溝、鎌倉時代の池状溝・南北溝・柱穴・土坑、室町時代の方形池・柱列・瓦葺施設・南北溝・土坑、江戸時代の石組溝・瓦製排水施設・礎石・水廻施設・溝・溝列・カド跡・石組井戸・土坑などを検出。	『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所
60	法勝寺跡・岡崎遺跡	発掘	江戸時代の南北溝、土塁を検出。法勝寺遺構の瓦が出土。	『京都市内遺跡発掘調査報告』平成19年度 京都市文化市民局
61	尊勝寺跡・岡崎遺跡	発掘	尊勝寺の遺構に伴うと考えられる整地層を確認。	『京都市内遺跡発掘調査報告』平成27年度 京都市文化市民局

※番号は、第5図 周辺調査位置図の番号と対応する。

第3章 遺構

第1節 基本層序（第6図）

調査開始前の当該地は、春日北通りの南側に位置する病院と個人住宅、山王社の社殿が存在した。調査は、建物解体・樹木伐採後の更地の状態から開始した。調査区範囲は住宅と社殿のあった箇所に該当するため地下に大きな影響を及ぼす構造物は存在しておらず、全体としては遺構が良好に残存していた。しかし、調査区東側は植栽による攪乱が多く存在し、主に1面目にかけては木の根によって攪乱を受けていた。

近・現代の造成土である表土は0.8～1.1mを測る。この表土を除去すると、第1遺構面にあたる中・近世の生活面、第2遺構面にあたる平安時代後期から鎌倉時代の生活面、第3遺構面（地山面）にあたる古代・平安時代の生活面を確認したため、この3つの遺構面の調査を行った。

第1遺構面は灰黄褐色砂泥で形成された生活面で、主に褐灰色砂泥の遺構が掘り込まれる。第1遺構面から0.3～0.4m掘り下げると、灰黄色泥砂で形成される第2遺構面である。平安時代後期から鎌倉時代にかけての遺構を確認できる、当遺跡の最も重要な面である。この面をさらに0.2m下げると地山の灰白色シルト質土で形成される第3遺構面である。

第2節 遺構の概要

発掘調査では、縄文時代から近世に至る約280基の遺構を確認した。検出した遺構は柵、ピット、土坑、集石遺構、溝、石列、塀、井戸、流路である。以下、主要な遺構についての概要を記す。

第1遺構面では、主に中世から近世にかけての遺構を検出した。主な遺構は土坑と溝と井戸である。集石遺構が多くみられ、下面の区画と同方向に区画溝を掘り込む様子が確認できる。

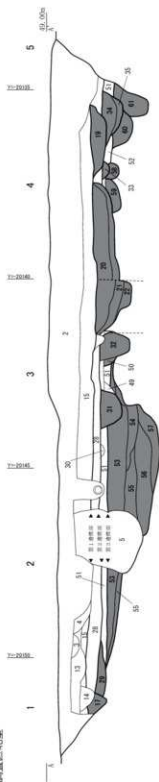
第2遺構面では、主に平安時代後期から鎌倉時代にかけての遺構を検出した。主な遺構はピット群や土坑、柵、塀、溝、井戸である。特に塀と溝は白河街区当時の区割りと考えられる。

第3遺構面では、主に、縄文時代～弥生時代と平安時代後期の遺構を検出した。主な遺構は土坑と井戸、流路である。平安時代後期の遺構は一部、上面の遺構と混同を避けるためこの面で調査を行った。

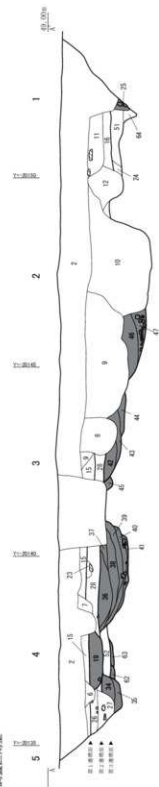
第3表 遺構概要表

時代	主な遺構
中世～近世 (第1遺構面)	柵 1 (1049・1048・1004・1006・1019) 集石遺構 1012、1013、1033 土坑 1005、1017、1030、1035、1041 溝 1040 (区画溝) 石列 1054 井戸 1022
平安時代後期 ～ 鎌倉時代前半 (第2遺構面)	ピット 2031 柵 2 (2007～2009、2012・2013、2015～2018) 土坑 2001、2079、2086、2090・2091、2092 溝 2085、2119 (区画溝) 塀 1
縄文時代～弥生時代 ・平安時代 (第3遺構面)	土坑 3019、3045、3078 井戸 3040 流路 3015

調査区北壁



調査区南壁



- 1~14 示・現代遺土
 15 灰褐色砂泥 しまりあり【近世色粘層】
 16 灰褐色砂泥 しまりあり【土成1001】
 17 灰褐色砂泥 しまりあり【土成1001】
 18 黒褐色土 しまりあり【土成1040】
 19 黒褐色土 しまりあり【土成1035】
 20 褐色粘砂泥 しまりあり【土成1035】
 21 褐色粘砂泥 しまりあり【土成1035】
 22 褐色粘砂泥 しまりあり【土成1035】
 23 褐色粘砂泥 しまりあり【土成1035】
 24 二上層粘砂泥
 25 褐色粘砂泥 粘質・しまりあり【土成1035】
 26 褐色粘砂泥 粘質・しまりあり【土成1035】

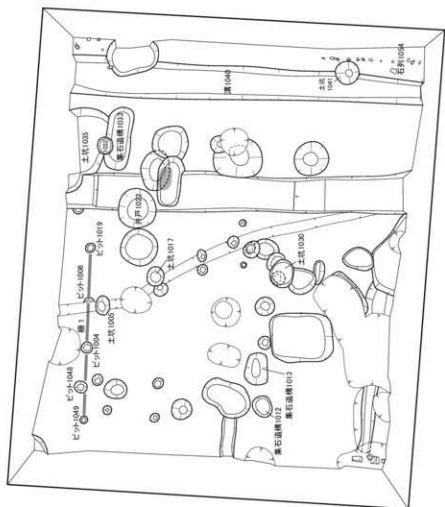
- 27 黒褐色粘砂 しまりあり
 28 灰褐色砂泥 しまりあり
 29 褐色粘砂泥 しまりあり【土成2145】
 30 褐色粘砂泥 しまりあり【土成2047】
 31 灰褐色砂泥 しまりあり【土成2047】
 32 灰褐色砂泥 しまりあり【土成2046】
 33 灰褐色砂泥 しまりあり【土成2127】
 34 灰褐色砂泥 しまりあり【土成2119】
 35 灰褐色砂泥 粘質・しまりあり【土成2102】
 36 褐色粘砂泥 粘質・しまりあり【土成2093】
 37 褐色粘砂泥 粘質・しまりあり【土成2093】
 38 褐色粘砂泥 粘質・しまりあり【土成2085】
 39 褐色粘砂泥 粘質・しまりあり【土成2085】

- 40 灰褐色粘砂 しまりあり【土成2085】
 41 黒褐色粘土 粘質・しまりあり【土成2085】
 42 褐色粘砂泥 粘質・しまりあり【土成2085】
 43 褐色粘砂泥 粘質・しまりあり【土成2085】
 44 褐色粘砂泥 粘質・しまりあり【土成2085】
 45 褐色粘砂泥 粘質・しまりあり【土成2085】
 46 褐色粘砂泥 粘質・しまりあり【土成2085】
 47 褐色粘砂泥 粘質・しまりあり【土成2085】
 48 褐色粘砂泥 粘質・しまりあり【土成2085】
 49 褐色粘砂泥 粘質・しまりあり【土成2085】
 50 褐色粘砂泥 粘質・しまりあり【土成2085】
 51 褐色粘砂泥 粘質・しまりあり【土成2085】
 52 灰白色粘土 粘質・しまりあり【土成2085】

- 53 灰褐色粘土 粘質・しまりあり【土成2085】
 54 灰褐色粘土 粘質・しまりあり【土成2085】
 55 灰褐色粘土 粘質・しまりあり【土成2085】
 56 灰褐色粘土 粘質・しまりあり【土成2085】
 57 褐色粘砂泥 粘質・しまりあり【土成2085】
 58 褐色粘砂泥 粘質・しまりあり【土成2085】
 59 褐色粘砂泥 粘質・しまりあり【土成2085】
 60 褐色粘砂泥 粘質・しまりあり【土成2085】
 61 褐色粘砂泥 粘質・しまりあり【土成2085】
 62 褐色粘砂泥 粘質・しまりあり【土成2085】
 63 褐色粘砂泥 粘質・しまりあり【土成2085】
 64 褐色粘砂泥 粘質・しまりあり【土成2085】

第6図 調査区北壁・南壁壁面図(縮尺1/100)

1 2 3 4 5



A

B

B

C

C

D

D

D

第7図 第1遺構面全体図 (縮尺 1/150)

北
北東
東
南東
南
南西
西
北西

1

2

3

4

5

6

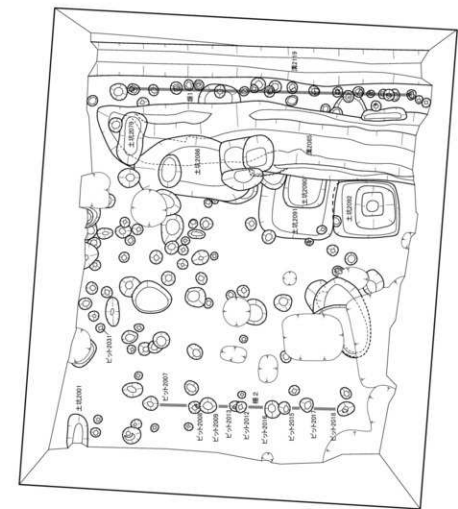
7

8

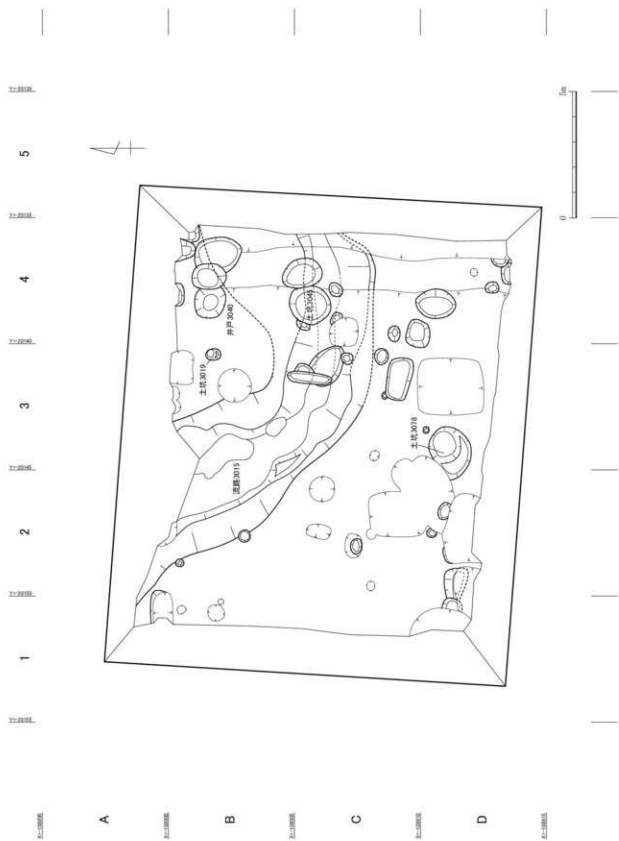
9

10

A



第8図 第2遺構面全体図 (縮尺1/150)



第9图 第3遺構面全体図 (縮尺 1/150)

第3節 第1遺構面検出の遺構（第7図・図版一）

第1遺構面は、灰黄褐色砂泥を遺構面としている。第1遺構面の遺構は、中世・近世を主とし、近現代の攪乱も同遺構面から検出している。

集石遺構 1012（第10図、図版二）

C2グリッドで検出した、 $0.88\text{ m} \times 0.74\text{ m}$ 、深さ 0.17 m を測る楕円形の土坑である。断面形は皿状で、埋土は暗灰褐色砂泥である。断面で拳大の石を組んでいる様子が確認できる。

埋土からは小片のみであるが室町時代後期（京都X期）頃の遺物が出土した。

集石遺構 1013（第10図、図版二）

C2グリッドで検出した、 $1.28\text{ m} \times 0.75\text{ m}$ 、深さ 0.47 m を測る長方形の土坑である。断面形は逆台形である。埋土は主に灰黄色砂泥で、 $15\sim 20\text{ cm}$ の石を組み、間を $5\sim 10\text{ cm}$ の石で埋めている様子が確認できた。

埋土からは、少量だが近世の遺物が出土している。

集石遺構 1033（第10図、図版二）

B4グリッドで検出した、 $2.5\text{ m} \times 0.96\text{ m}$ 、深さ 0.47 m を測る長楕円形の土坑である。断面形はU字形である。埋土は主に灰褐色砂泥である。

埋土からは14世紀代（京都VII期中～VIII期古）の遺物が出土した。

土坑 1005（第7図、図版一）

B2グリッドで検出した $0.77\text{ m} \times 0.55\text{ m}$ 、深さ 0.32 m を測る、楕円形の土坑である。遺構の中心を近代の攪乱で壊されている。断面形は皿状である。埋土は灰黄褐色砂泥で、埋土中からはほぼ完形の土師器皿が複数枚出土した。

埋土からは11世紀後半～12世紀初頭（京都V期中～VI期古）の遺物が出土した。

土坑 1017（第10図、図版一）

B3グリッドで検出した土坑である。土坑1005と同じく中心を近代の攪乱で壊されている。 $0.79\text{ m} \times 0.69\text{ m}$ を測る円形の土坑で、検出面からの深さは 0.25 m である。断面形は逆台形である。埋土はしまりの強い褐灰色砂泥で、埋土中からは土師器皿や瓦質土器の盤などが出土した。

埋土からは、13世紀半ば～14世紀前半（京都VI期新～VII期中）の遺物が出土し、一部に平安時代後期の遺物も混入する。

土坑 1030（第10図）

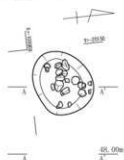
C3グリッドで検出した、 $1.17\text{ m} \times 0.93\text{ m}$ 、深さ 0.1 m を測る、円形の土坑である。断面形は皿状である。埋土は明黄褐色土が混ざる褐灰色砂泥で、埋土中からは炭化物と土師器皿の細片が多く出土した。

埋土からは13世紀後半～14世紀前半（京都VII期古～新）の遺物が出土した。

土坑 1035（第7図）

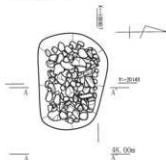
B3・4グリッドで検出した、 $2.69\text{ m} \times (1.41\text{ m})$ 、深さ 0.35 m を測る、平面形は隅丸方形とみられる土坑である。断面形はU字形である。埋土は3層に分かれており、いずれも土器が集積して出土している。なお、各層で遺物に僅かながら年代差が認められる。

集石遺構 1012



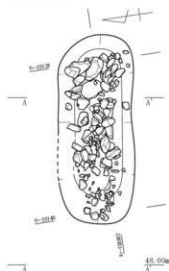
1 暗灰色砂泥 しまり強い

集石遺構 1013

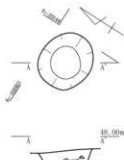


- 1 灰黄色粘質土 粘性・しまり強い
- 2 オリーブ灰色泥砂 しまり強い
- 3 暗青灰色粘土 しまり強い

集石遺構 1033



土坑 1017

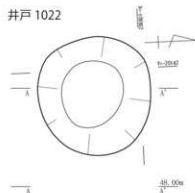


1 褐灰色砂泥 しまり強い

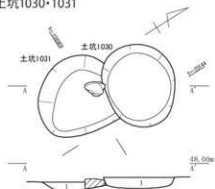


- 1 暗灰色砂泥 しまり強い
- 2 灰褐色砂泥 しまりあり
- 3 灰黄褐色砂泥 しまり強い
- 4 黒褐色土 しまり強い

井戸 1022



土坑1030・1031



- 土坑 1030
1 褐灰色砂泥 明黄褐色土・炭化物・土器多まじる
- 土坑 1031
1 灰褐色砂泥 炭化物・土器多まじる



- 1 灰オリーブ色泥砂 しまり強い
- 2 灰黄色粘質土 灰白色粘土ブロック多く含む
- 3 暗灰色砂泥 しまり強い
- 4 オリーブ褐色砂泥 しまり・粘性強い
- 5 灰黄褐色砂泥 しまり強い
- 6 暗灰色砂泥 しまりあり
- 7 暗灰色砂泥 しまり強い
- 8 オリーブ褐色砂泥 しまりあり
- 9 黒褐色粘質土 灰白色砂質土まじる
- 10 暗灰色砂質土



第10図 第1遺構面遺構図1 (縮尺1/50)

埋土からは12世紀代～13世紀前半(京都V期中～VI期新)の遺物が出土した。

土坑 1041 (第12図、図版二)

D4グリッドで検出した、 0.94×0.91 m、深さ0.24 mを測る土坑である。

平面形は円形で、埋土は褐灰色砂泥である。

溝1040を切っており、遺物も16世紀ごろと新しいものが主になるが、一部下層のもののみ入る12～13世紀の遺物も入る。

井戸 1022 (第10図、図版二)

B3グリッドで検出した、 1.54×1.49 m、深さ1.43 mを測る円形の井戸である。断面形は逆台形である。埋土はオリーブ褐色砂泥を主とし、南から北へ流れるように堆積している。

埋土からは14世紀後半～15世紀前半(京都VII期古～新)の遺物が出土した。

柵 1 (第11図、図版一)

B1～3グリッドで検出した、東西方向の柱穴列(柱穴1049・1048・1004・1006・1019)である。柱穴の大きさは0.45 m前後で、一部に礎石が確認できる。埋土は灰黄褐色砂泥である。

埋土からは12世紀～13世紀代(京都V～VI期)の遺物が出土した。

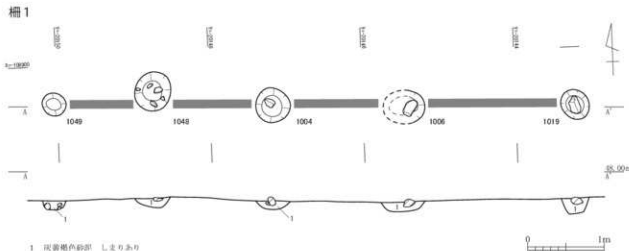
溝 1040 (第12図、図版二)

B～D4グリッドで検出した、調査区を南北方向に貫く、幅1.40 mを測る溝である。断面形は皿状で検出面からの深さは0.19 mである。埋土は黒褐色土である。

埋土からは13世紀後半～14世紀前半(京都VII期古～新)の遺物が出土した。

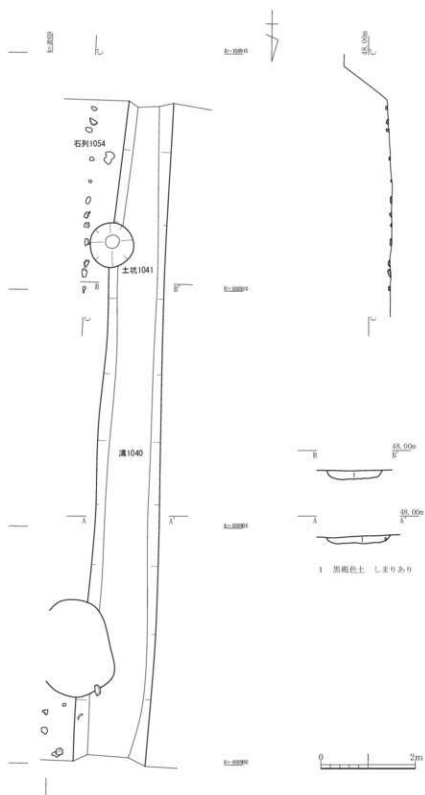
石列 1054 (第12図、図版二)

D4グリッドで検出した石列である。溝1040に沿う形で確認した。石は掘方を伴わず、整地層に直接石を埋め込み、上面が平らになるように川原石を並べている。石の大きさは約0.15 m前後である。



第11図 第1遺構面遺構図2 (縮尺1/50)

溝 1040・石列 1054



第12図 第1遺構面遺構図3 (縮尺1/80)

第4節 第2遺構面検出の遺構（第8図・図版三）

第2遺構面は、灰黄色泥砂を遺構面としている。第2遺構面の遺構は、平安時代後期から鎌倉時代にかけての時期に該当し、院政期において白河街区が営まれた時期に相当する。

ピット 2031（第13図、図版三）

B 2 グリッドで検出した、 $0.36\text{ m} \times 0.35\text{ m}$ 、深さ 0.15 m を測る円形のピットである。断面形は逆台形である。埋土は褐灰色泥砂で、軒平瓦の凹部を上面にし、検出面と水平になるよう埋め込んでいる様子を確認した。

埋土からは12世紀前半の軒平瓦が出土した。

土坑 2001（第8図）

A 1 グリッドで検出した、 $(1.35\text{ m}) \times 0.8\text{ m}$ 、深さ 0.26 m の長楕円形の土坑である。埋土は灰黄褐色土である。埋土からは12世紀前半～13世紀前半（京都V期中～VI期新）の遺物が出土した。

土坑 2079（第13図、図版四）

B 4 グリッドで検出した、土坑 1033 直下に位置する長楕円形の土坑である。規模は $2.1\text{ m} \times 0.94\text{ m}$ 、深さ 0.35 m を測る。断面形はU字形である。埋土は褐灰色泥砂である。

埋土からは13世紀半ば～後半（京都VI期新～VII期古）の遺物が多く出土した。

土坑 2086（第14図、図版四）

B・C 3～4グリッドで、溝 2085 を壊す形で検出した、 $4.65\text{ m} \times 2.43\text{ m}$ 、深さ 0.59 m を測る長楕円形の土坑である。断面はU字形である。埋土は褐灰色砂泥で、底部に石が集中している状況を確認した。

埋土からは13世紀半ば～14世紀初頭（京都VI期新～VII期中）の遺物が出土した。

土坑 2090・2091（第13図、図版五）

C 3 グリッドで検出した、 $2.94\text{ m} \times (2.41\text{ m})$ を測る方形の土坑である。断面形は箱型で、検出面からの深さは 0.36 m である。溝 2085 によって壊されている。埋土は土坑 2090 が炭化物を含む灰黄褐色砂泥で、土坑 2091 が灰褐色土である。調査時点では重複する別遺構としたが、検討の結果、同一遺構として報告する。

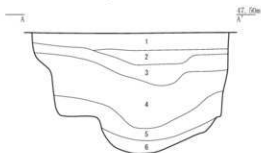
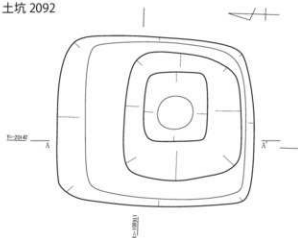
埋土からは12世紀前半～13世紀前半（京都V期中～VI期新）の遺物が出土した。

土坑 2092（第13図、図版五）

B 3 グリッドで検出した、 $2.64\text{ m} \times 2.26\text{ m}$ 、深さ 1.6 m を測る、方形の土坑である。埋土は灰黄褐色砂泥～にぶい黄褐色土で、中央がたわむように堆積している。土坑 2091 に壊される。性格が不明なため土坑としたが、深度及び形状から井戸である可能性も考えられる。

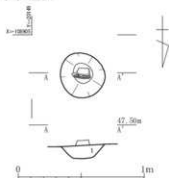
埋土からは12世紀前半～半ば（京都V期古～新）の遺物が出土した。

土坑 2092



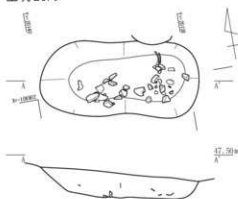
- 1 褐色色砂泥 しまり強い
- 2 灰黄褐色砂泥 しまり強い 土器多く含む
- 3 灰黄褐色粘質土 灰白色粘土ブロック多く含む
- 4 褐色色砂泥 灰白色粘土ブロック多く含む
- 5 灰白色粘質土
- 6 黒褐色粘土

ピット 2031



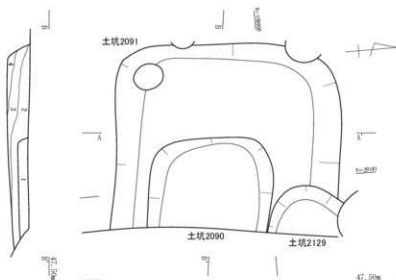
- 1 褐色色砂泥 しまり強い

土坑 2079



- 1 褐色色砂泥 草木の種多く含む

土坑 2090・2091

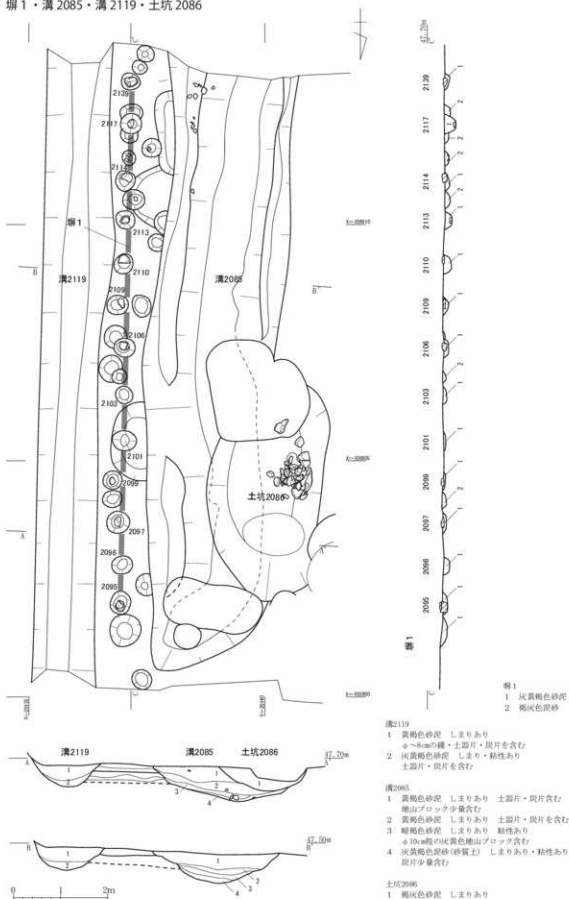


- 1 灰黄褐色砂泥 粘性・しまり強い (土坑 2090)
- 2 灰褐色土
- 3 褐色色砂泥 しまりあり
- 4 黒褐色砂泥 しまり強い



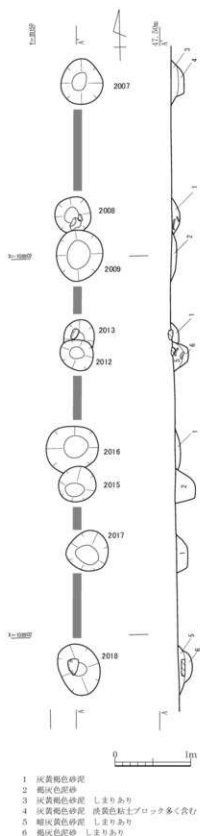
第 13 図 第 2 遺構面遺構図 1 (縮尺 1/50、ピット 2031 は 1/30)

堀1・溝2085・溝2119・土坑2086



第14図 第2遺構面遺構図2 (縮尺1/80)

欄 2



第15図 第2遺構面遺構図3 (縮尺1/50)

溝 2085 (第14図、図版六・七)

B～D 4 グリッドで検出した、南北方向にのびる溝状遺構である。南端は調査区外へと続く。幅 2.43 m、深さ 0.59 m で、断面形はU字形である。

ある程度一定の幅で検出できたことから溝としたが、北端の収束状況や切りあう土坑の状況、また周辺の遺跡の事例から土取り穴等の土坑が連続していた可能性が高いと考えられる。

埋土からは 12 世紀半ば～13 世紀前半 (京都VI期新～VII期中) の遺物が出土した。

溝 2119 (第14図、図版六)

A～D 4 グリッドで検出した、堀1と並行して南北方向に延びる溝である。軸方向はN-2°-Eである。幅 0.78 m を測り、南北ともに調査区外へ続く。断面はU字形で上下2層に分かれており、遺物にもわずかながら時期差が見られる。

埋土からは 12 世紀後半～13 世紀後半 (京都VI期古～VII期古) の遺物が出土し、段階的に埋まったものと考えられる。

堀 1 (第14図、図版七)

A～D 4 グリッドで検出した、溝 2119 と並行して南北方向に走る柱穴列 (柱穴 2095～2097、2099、2101、2103、2106、2109、2110、2113、2114、2132、2135) である。柱穴の大きさは 0.3～0.5 m で礎石を伴うものが多く確認できた。主な柱穴は 0.9 m 間隔で並んでおり、周囲のピットも建て替え等に伴うものと考えられる。軸方向はN-2°-Eである。

埋土からは平安時代後期～鎌倉時代 (京都V～VI期) を中心とした遺物が出土した。

欄 2 (第15図、図版七)

A～D 2 グリッドで検出した、南北方向の柱穴列 (柱穴 2007～2009、2012・2013、2015～2018) である。柱穴の大きさは 0.5～0.6 m 前後で、一部に礎石が確認できる。

埋土からは、主に平安時代後期～鎌倉時代 (京都V期～VII期) の遺物が出土した。

第5節 第3遺構面検出の遺構（第9図・図版八）

第3遺構面は、灰白色シルト質土を遺構面としている。第3遺構面の遺構は、平安時代後期の遺構と縄文時代の流路を主とする。

土坑 3019（第16図、図版八）

B3グリッドで検出した、0.6m×0.46m、深さ0.4mの円形の土坑である。土器を多く含んでおり、埋土は黒褐色砂泥である。

埋土からは12世紀後半（京都V期新～VI期古）の遺物が出土した。

土坑 3045（第16図、図版九）

B・C3グリッドで検出した、1.65m×1.63m、深さ0.25mの円形の土坑である。断面形は箱形で埋土は褐灰色泥砂である。

埋土からは12世紀後半～13世紀前半（京都VI期古～中）の遺物が出土した。

土坑 3078（第16図、図版九）

D3グリッドで検出した、2.05m×1.58m、深さ1.24mの土坑である。埋土は暗灰黄色砂泥で、灰白色粘土ブロックを多く含む。遺物は土師器皿や須恵器などが出土しているがいずれも小片である。

井戸 3040（第16図、図版十）

B4グリッドで検出した、1.38m×1.29m、深さ0.87mの隅丸方形の井戸である。埋土は灰黄褐色土を主体とする。溝2085の下層で確認した。

埋土からは13世紀代（京都VI期中～VII期古）の遺物が出土した。溝2085と同時期の遺物が主であるため、溝2085を掘りこんだ当時は、この井戸は未だ使用されており、土坑群とともに埋められたと考えられる。

流路 3015（第17図、図版十）

A1～D4グリッドにかけて検出した、調査区を南東から北西へ横断し、広範囲に広がる流路である。水流の方向については検討が必要だが、調査区南東側の方が流路底部の標高が高く、調査区内でも46.1～46.6mと50cm程度ではあるが、堆積状況に差がみられる。

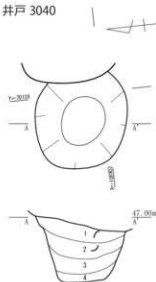
埋土からは縄文時代から弥生時代の遺物が多く出土したが多くは水流による磨滅をうけており、時期を特定するまでに至らなかったが、遺構の年代としては上限を縄文時代後期とし、平安時代前期までの期間に埋没したと考えられる。

土坑 3019



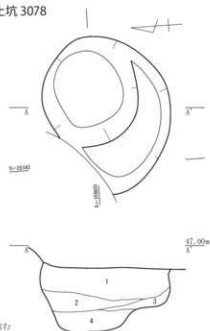
1 黒褐色砂泥 しまり強い

井戸 3040



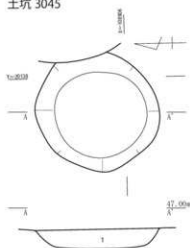
1 灰黄褐色土 しまりあり
2 細灰色砂泥 粘性・しまりあり
3 黒褐色粘質土 灰白色粘土ブロック多く含む
4 黒色粘土 しまり強い

土坑 3078



1 暗灰黄色砂泥 粘性・しまり強い
2 灰黄褐色泥砂 灰白色粘土ブロック含む
3 暗灰黄色粘質土 灰白色粘土ブロック多く含む
4 灰白色粘土 しまり強い

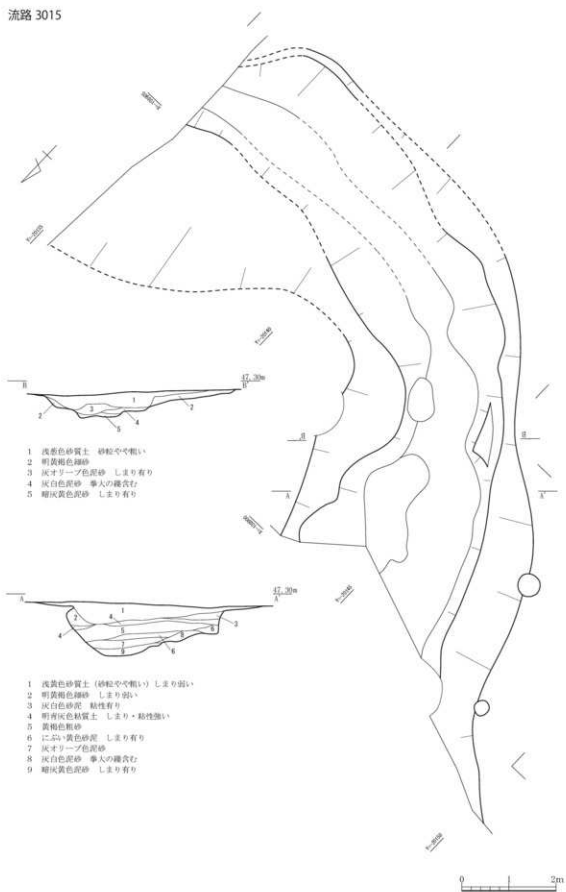
土坑 3045



1 褐灰色泥砂 しまりあり



第 16 図 第 3 遺構面遺構図 1 (縮尺 1/50)



第17図 第3遺構面遺構図2 (縮尺1/80)

第4章 遺物

第1節 遺物の概要

今回の調査で出土した遺物はコンテナ数で26箱である。整理段階でランク分けを行った結果、31箱となった。遺物の種類は土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、陶磁器、焼締陶器、縄文土器、石製品、金属製品など縄文時代から江戸時代までの遺物が出土した。以下、遺物別に概要を述べる。掲載遺物の詳細については、第5表の出土遺物観察表に記載した。

第4表 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
中世～近世 (第1遺構面)	土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、白色土器、焼締陶器、青白磁、白磁、青磁、瓦、石製品、銅銭		土師器23点、須恵器2点、瓦器1点、瓦質土器7点、白色土器2点、焼締陶器7点、青白磁1点、白磁4点、青磁3点、瓦3点、石製品1点、銅銭2点		
平安時代後期～ 鎌倉時代前期 (第2遺構面)	土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、白色土器、山形磁、焼締陶器、陶器、白磁、青磁、瓦、石製品		土師器24点、須恵器8点、瓦器9点、瓦質土器4点、白色土器4点、山茶碗3点、焼締陶器6点、陶器1点、白磁3点、青磁6点、瓦10点、石製品4点		
縄文時代～ 弥生時代・ 平安時代後期 (第3遺構面)	土師器、瓦質土器、白磁、弥生土器、縄文土器、瓦		土師器8点、瓦質土器1点、白磁1点、縄文土器2点、瓦2点		
合計		31箱	156点(9箱)	2箱	20箱

第2節 第1遺構面出土遺物

集石遺構 1033 (第18図、図版十一)

1は土師器の皿である。白色系のへそ皿である。2は瓦質土器の鍋である。口縁部は断面L字状で、端部に向かって肥厚する。外面全体に煤が付着する。3は白磁の皿である。口ハゲで、見込には一条の沈線が巡る。4は白磁の四耳壺である。5は軒丸瓦の瓦当である。瓦当文様は複弁蓮華文である。中房が凸状で蓮子が1+4である。中房の周りに葦が巡る。播磨系である。

石組 1033 から出土した遺物は、14世紀代（Ⅶ期中～Ⅶ期古）のものと考えられる。

土坑 1005 (第18図、図版十一)

6・7は土師器の皿である。二段ナデで、6は口径9.2cmの小型、7は口径14.6cmの大型の皿である。口縁端部は立ち上がる。

土坑 1005 から出土した遺物は、11世紀後半～12世紀初頭（京都Ⅴ期中～Ⅵ期古）のものと考えられる。

土坑 1017 (第18図、図版十一)

8は土師器の皿である。二段ナデで、口縁端部はやや立ち上がる。11世紀後半～12世紀前半（京都Ⅴ期古～中）の混入品である。9は瓦質土器の盤である。体部から口縁部にかけて大きく肥厚し、端部は面をなす。

土坑 1017 から出土した遺物は、13 世紀半ば～14 世紀前半（京都Ⅵ期新～Ⅶ期中）のものと考えられる。

土坑 1030（第 18 図、図版十一）

10～15 は土師器の皿である。10 は口径が 5.3cm の小型のコースター型の皿で、胎土は灰白色である。11 は白色系の碗形の皿である。12～15 は褐色系の皿である。12・13 は口径 8.1～8.6cm の小型、14・15 は口径 11.6～12.0cm の大型である。12 は口縁部に煤が付着する。14・15 は口縁部がやや外反する。16 は瓦質土器の鍋である。口縁部は断面 L 字状である。17 は瓦質土器の片口鉢である。底部と体部の境は丸みを持ち、口縁端部は内側と外側に肥厚し面をなす。18 は青白磁の蓋である。上面に文様を陽刻する。19 は白磁の蓋であろうか。下面は露胎する。20 は白磁の口ハゲ碗である。21・22 は軒丸瓦の瓦当である。21 は瓦当文様が蓮弁とみられる。22 は左巻きの巴文である。

土坑 1030 から出土した遺物は、13 世紀後半～14 世紀前半（京都Ⅶ期古～新）のものと考えられる。

土坑 1035（第 18 図、図版十一・十二）

23～30 は土師器の皿である。23・24 はコースター型の皿である。25～30 は二段ナデで口縁端部は立ち上がる。25～27 は口径 9.2～9.8cm の小型、28～30 は口径 12.0～14.4cm の大型である。31 は白色土器の高坏である。32 は青磁碗の底部である。内面と外面の体部から高台外側まで施釉する。33・34 は焼締陶器の甕である。33 は口縁部に縁帯をもつ。体部の 34 は外面に押印文がみられる。共に常滑産である。

土坑 1035 から出土した遺物は、12 世紀代～13 世紀前半（京都Ⅴ期中～Ⅵ期新）のものと考えられる。

土坑 1041（第 19 図、図版十二）

35 は焼締陶器の甕である。口縁部が下方にやや肥厚し、端部は面をなす。36 は軒丸瓦である。瓦当文様は複弁蓮華文で、蓮子までは確認できない。山城系とみられる。35・36 は 12～13 世紀（京都Ⅴ～Ⅵ期）に位置づけられる。

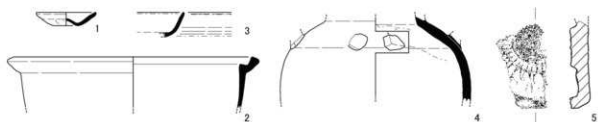
土坑 1041 から出土した遺物は、16 世紀のものと考えられるが、12～13 世紀に属する遺物も多く出土している。

井戸 1022（第 19 図、図版十二）

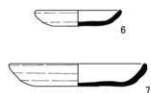
37 は土師器のコースター型の皿である。12 世紀代の混入品と考えられる。38 は須恵器の捏ね鉢である。口縁端部が上方と下方に肥厚し、縁帯状となる。39 は須恵器の高坏脚部である。2 条の沈線が巡り、2ヶ所に透かし孔をもつとみられる。6 世紀の混入品である。40 は瓦質土器の鍋である。口縁部は断面 L 字状である。

井戸 1022 から出土した遺物は、14 世紀後半～15 世紀前半（京都Ⅷ期古～新）のものと考えられる。

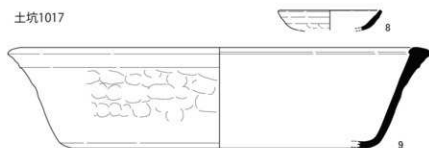
石組1033



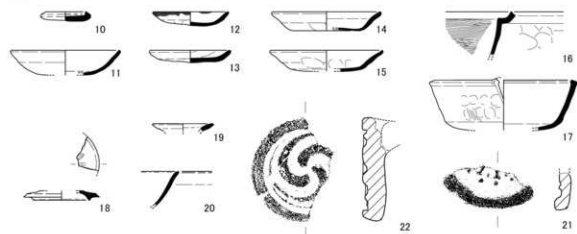
土坑1005



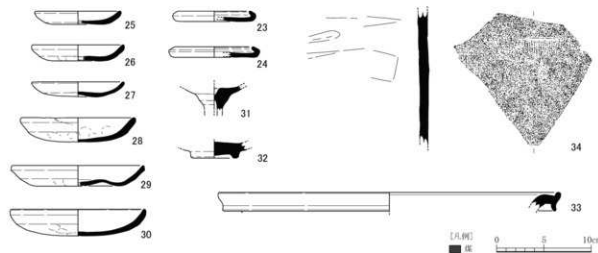
土坑1017



土坑1030



土坑1035



[凡例] 0 5 10cm

第18图 第1遺構面出土遺物実測図1 (縮尺1/4)

櫛 1 柱穴 1019 (第 19 図、図版十二)

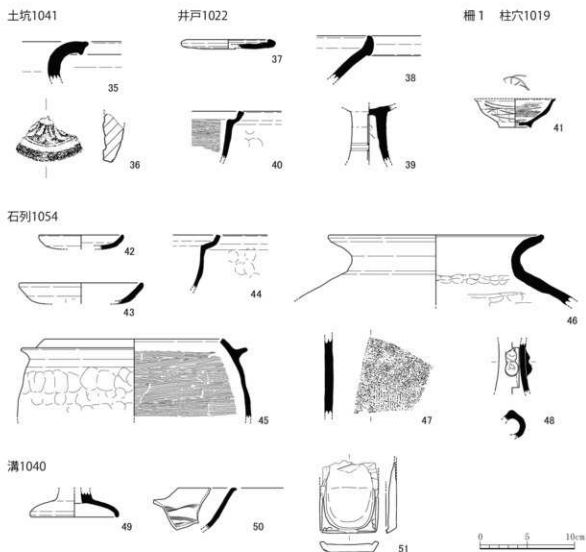
41 は瓦器の小碗である。内面は横方向のミガキ、外面は粗い斜め方向のミガキを施す。見込には輪状の暗文がみられる。高台は断面逆三角形である。

柱穴 1019 から出土した遺物は、12 世紀～13 世紀代 (京都 V～VI 期) のものと考えられる。

石列 1054 (第 19 図、図版十二)

42・43 は土師器の皿である。42 は口径 9.0cm の小型、43 は口径 13.2cm の大型である。44 は瓦質土器の鍋である。口縁部は断面 L 字状で、体部はやや内湾する。45 は瓦質土器の羽釜である。鏝はやや上向きにつき、体部は内湾する。46 は焼締陶器の甕である。口縁部は大きく外反し、端部をややつまみ上げる。体部外面には自然釉がかかる。常滑産である。47 は焼締陶器の体部片である。外面に押印文がみられる。48 は青磁の水注の頸部と思われる。外面に球状の装飾を貼り付ける。

石列 1054 から出土した遺物は、12 世紀後半～13 世紀前半 (京都 VI 期古～新) のものと考えられる。



第 19 図 第 1 遺構面出土遺物実測図 2 (縮尺 1/4)

溝 1040 (第 19 図、図版十二)

49 は白色土器の高坏の裾部である。50 は白磁の碗である。口縁端部は外方に折れる。内面に文様を施す。51 は石製品の硯である。陸部から海部へ下がる部分まで残存する。周縁部には一条の線と半円を連続させた文様が刻まれる。

溝 1040 から出土した遺物は、13 世紀後半～14 世紀前半(京都Ⅶ期古～新)のものと考えられる。

第 3 節 第 2 遺構面出土遺物

ピット 2031 (第 20 図、図版十三)

52 は軒平瓦である。均正唐草文で、中心飾は C 字下向形である。播磨系である。

ピット 2031 から出土した遺物は、12 世紀代～13 世紀代(京都Ⅴ～Ⅵ期)のものと考えられる。

土坑 2001 (第 20 図、図版十三)

53・54 は土師器の皿である。二段ナデで、口縁端部は立ち上がる。口径が 9.4～9.6cm の小型の皿である。55 は山茶碗である。高台は低く、端部に杓痕が残る。底部中央は器壁が約 3mm と薄い。56 は焼締陶器の壺の底部である。

土坑 2001 から出土した遺物は、12 世紀前半～13 世紀前半(京都Ⅴ期中～Ⅵ期新)のものと考えられる。

土坑 2079 (第 20 図、図版十三)

57 は土師器の皿である。口縁部は外反する。口縁部に煤が付着する。58 は瓦器の碗である。内面に粗いミガキが施される。内外面とも炭素が吸着しておらず灰白色を呈する。高台は非常に低く粗い作りである。和泉型である。59 は須恵器の捏ね鉢である。口縁端部が上方と下方に肥厚し、縁帯状となる。60 は須恵器の甕である。体部外面に平行状のタタキを施す。口縁部外面には斜め方向の工具痕がみられる。

土坑 2079 から出土した遺物は、13 世紀半ば～後半(京都Ⅵ期新～Ⅶ期古)のものと考えられる。

土坑 2086 (第 20 図、図版十三)

61 はロクロ土師器かと思われる供膳具の底部である。色調は灰白色を呈する。62 は白色土器の皿である。円盤状の高台で、底部外面に糸切り痕が残る。内外面に煤が付着する。63 は須恵器の甕である。体部外面に平行状のタタキを施す。口縁端部は上方につまみ上げる。東播系である。64 は青磁の皿である。見込に櫛描きとヘラ描きで文様を描く。65 は青磁の鉢である。口縁部は外方に折れ、端部は上方に折れる。66 は青磁の水注の注口部である。67 は軒丸瓦である。瓦当文様は右巻きの巴文で外区に珠文がめぐる。胎土が硬質で、播磨系である。68 は滑石製の石製品で、石鍋を温石に再加工したものと思われる。

土坑 2086 から出土した遺物は、13 世紀半ば～14 世紀初頭(京都Ⅵ期新～Ⅶ期中)のものと考えられる。

土坑 2090 (第 20 図、図版十三)

69・70 は土師器の皿である。口径 9.2～9.6cm の小型の皿である。71 は瓦質土器の盤である。底部から体部は丸みをもって立ち上がり、口縁端部は水平な面をもつ。

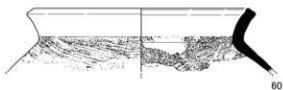
ピット2031



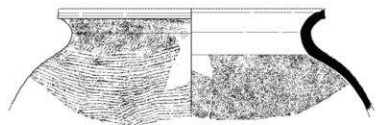
土坑2001



土坑2079



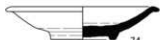
土坑2086



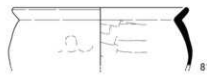
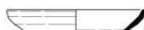
土坑2090



土坑2091



土坑2092



第20図 第2遺構面出土遺物実測図1 (縮尺1/4)

土坑 2090 から出土した遺物は、12 世紀前半～13 世紀前半（京都 V 期中～VI 期新）のものと考えられる。

土坑 2091（第 20 図、図版十四）

72・73 は土師器の皿である。72 は口径 9.2cm の小型、73 は口径 15.6cm の大型の皿である。74 は白色土器の皿である。高台は削り出しで、口縁端部は強く外反する。高台内に墨書がみられる。75 は瓦器の碗である。内面は密にミガキを施し、見込には渦巻き状の暗文がみられる。高台は低く、ややつぶれた形状である。76 は白磁の碗である。口縁端部をわずかにくぼませ、内面に突帯を縦に貼り付ける輪花碗である。

土坑 2091 から出土した遺物は、12 世紀前半～13 世紀前半（京都 V 期中～VI 期新）のものと考えられる。

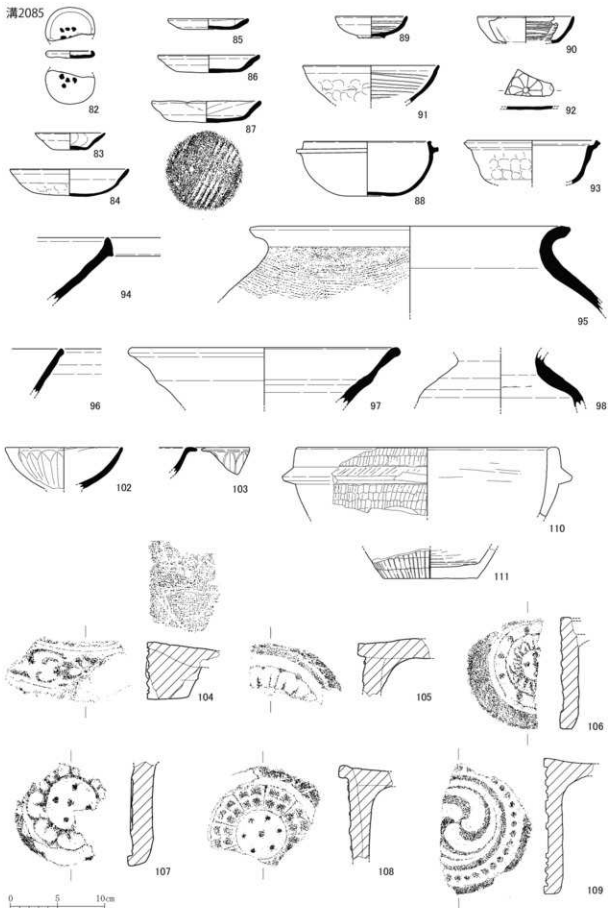
土坑 2092（第 20 図、図版十四）

77～80 は土師器の皿である。二段ナデの皿で、77・78 は口径 9.8～9.9cm の小型、79・80 は口径 14.0～14.6cm の大型である。78・79 は口縁部に煤が付着する。81 は土師器の甕である。平安時代前期の混入品と考えられる。

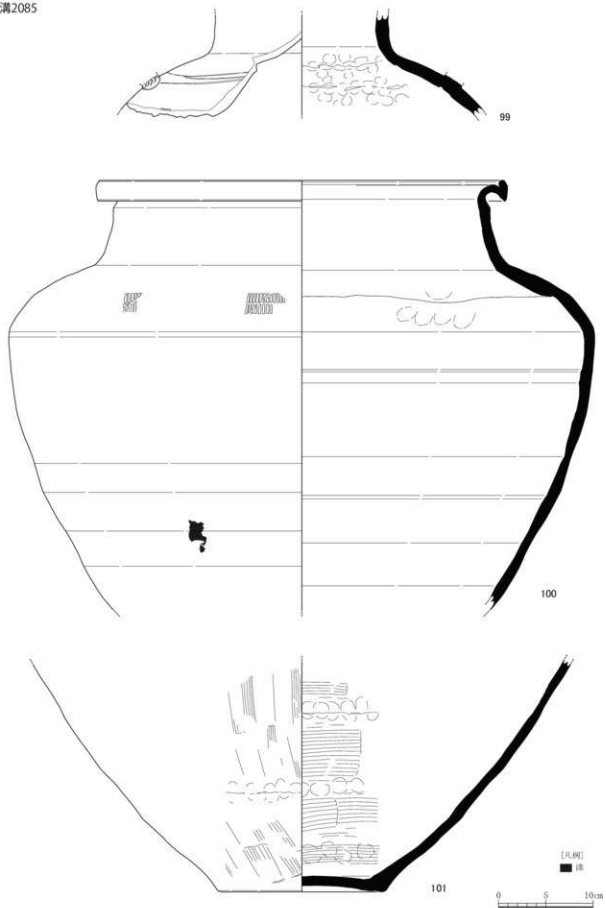
土坑 2092 から出土した遺物は、12 世紀前半～半ば（京都 V 期古～新）のものと考えられる。

溝 2085（第 21・22 図、図版十四～十六）

82～87 は土師器の皿である。82 は口径 5.2cm の小型のコースター皿である。残存部の範囲で底部外面に 4 つの点、内面に 5 つの点が、墨あるいは漆のようなもので描かれる。外面は「五」、内面は「六」のように点が配置されている。83・84 は白色系の碗形の皿である。83 は口径 7.4cm の小型で底部を上方にやや押し上げる。84 は口径 12.6cm の大型である。85～87 は褐色系の皿である。85 は口径 8.6cm の小型で口縁部に煤が付着する。86 は口径 10.8cm の中型、87 は口径 11.6cm の大型で、口縁部はやや外反する。87 の底部外面に板状圧痕が残る。88 は土師器の小型の羽釜である。底部は上方にやや押し上げられ、体部は丸をもつ。短い鏝が水平につく。外面の鏝より下方は煤が付着する。89・90 は瓦器の小碗である。89 は断面逆三角形の高台を貼り付ける。90 は体部を縦線状に内側に押し込み、輪花を形作っているとみられる。91 は瓦器の碗である。内面に粗い平行状のミガキを施す。桶葉型である。92 は瓦器の輪花碗の底部と思われる。内面に菊花文の暗文を施す。93 は瓦質土器の小型の鍋である。口縁部のみに炭素が吸着する。外面に煤が付着する。94 は須恵器の捏ね鉢である。口縁端部が上方と下方に肥厚し、縁带状となる。東播系である。95 は須恵器の甕である。体部外面に平行状のタタキを施す。焼成不良で、全体が橙色から褐色を呈す。96 は山茶碗の鉢である。常滑産である。97 は陶器の鉢である。体部上方で段が付き、口縁部は外反し端部はやや肥厚する。98 は陶器の壺である。99 は焼締陶器の四耳壺である。肩部に文様かと思われる線刻がある。常滑産である。100・101 は焼締陶器の甕である。100 は口縁部から体部が残存する。口縁端部に縁帯をもつ。肩部に押印文を施し、自然釉がかかる。体部外面に漆を塗った布が付着しており、割れを補修したものと考えられる。101 は底部で、上げ底状である。体部はやや内湾して大きく開く。102 は青磁の碗である。外面に蓮弁文を施す。103 は青磁の皿である。口縁部は外折し、体部外面に蓮弁文を施す。104



第21图 第2遺構面出土遺物実測図2(縮尺1/4)



第22図 第2遺構面出土遺物実測図3 (縮尺1/4)

は軒平瓦である。中心飾が唐花蓋文で左右対称に転回する。丹波系である。105～109は軒丸瓦である。105は複弁八葉蓮華文である。播磨系である。106は複弁五葉蓮華文とみられ、蓮子は1+4である。山城系で、幅枝産とみられる。107は単弁八葉蓮華文である。中房は平坦で蓮子は1+4である。播磨系である。108は複弁九葉蓮華文である。蓮子は1+6である。播磨系である。109は右巻きの巴文である。外区に珠文を巡らせる。胎土は硬質で、播磨系である。110・111は滑石製の石鍋である。110は鏝付型で、残存部の大部分は被熱により表面が灰白色化している。111は底部である。いずれも体部外面に数段にわけて丁寧にノミで削った痕跡がみられる。

溝 2085 から出土した遺物は、12世紀半ば～13世紀前半（京都VI期新～VII期中）のものと考えられる。

溝 2119（第23図、図版十六・十七）

112・113は土師器の皿である。112は口径8.4cmの小型、113は口径13.0cmの大型である。114は白色土器の皿である。底部から口縁部に向けて肥厚していき、口縁端部は水平方向と垂直方向に面をもつ。115は白色土器の高坏の脚部である。外面に縦方向のケズリを施す。116は瓦器の小碗である。内面に粗い平行状のミガキを施す。高台は粗い作りで断面は低い三角形である。117は瓦器の碗である。内面に粗い平行状のミガキを施す。楠葉型である。118は瓦質土器の鍋である。口縁部は断面L字状である。外面に煤が付着する。119は須恵器の鉢である。底部から体部の立ち上がりはゆるやかで、口縁端部は内上方につまみ上げる。120は須恵器の甕である。体部外面に平行状のタタキを施す。東播系である。121は山茶碗の片口小皿である。無高台で底部外面に糸切り痕が残る。122は常滑の太平鉢である。内面に自然釉がかかる。使用のため内面が平滑になる。123は白磁の碗である。幅の広い玉縁口縁である。124は白磁の蓋である。125は軒丸瓦である。外区に珠文が巡る。胎土は硬質で、播磨系とみられる。126～128は軒平瓦である。126・127は折曲げ技法の唐草文である。127は瓦当全体に布目が残る。128は幾何学文様である。播磨系である。129は円盤状石製品である。最大径5.0cm、厚さ1.7cmで滑石製である。

溝 2119 から出土した遺物は、12世紀後半～13世紀後半（京都VI期古～VII期古）のものと考えられる。

溝 2 柱穴 2007（第23図、図版十七）

130は瓦質土器の鍋である。口縁部は断面L字状である。体部外面には煤が付着する。

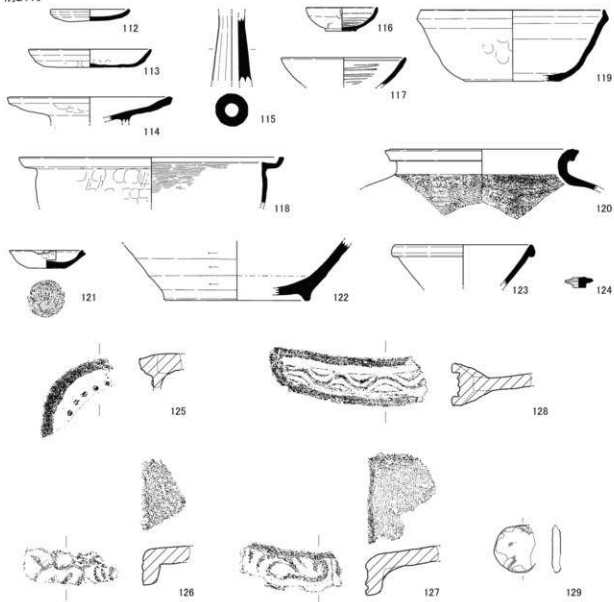
柱穴 2007 から出土した遺物は、13世紀後半～14世紀前半（京都VII期古～中）のものと考えられる。

溝 2 柱穴 2008（第23図、図版十七）

131は須恵器あるいは焼締陶器の鉢である。低い高台がつき、体部は丸みをもって広がる。内面は使用により平滑になる。

柱穴 2008 から出土した遺物は、12世紀代（京都V期中～VI期古）のものと考えられる。

溝2119



槽2



第23図 第2遺構面出土遺物実測図4 (縮尺1/4)

第4節 第3遺構面出土遺物

土坑3019（第24図、図版十七）

132は土師器の皿である。二段ナデの境が不明瞭で一段に近い。

土坑3019から出土した遺物は、12世紀後半（京都V期新～VI期古）のものと考えられる。

土坑3045（第24図、図版十七）

133は土師器の皿である。134・135は軒丸瓦である。134は単弁八葉蓮華文である。播磨系である。135は内区に右巻き巴文を配し、蓮弁の周りに苳を巡らせる。山城系である。

土坑3045から出土した遺物は、12世紀後半～13世紀前半（京都VI期古～中）のものと考えられる。

井戸3040（第24図、図版十七）

136～141は土師器の皿である。136は口径7.0cmの小型のコースター皿である。137・138は口径8.1～10.4cmの小型、139～141は口径12.1～12.2cmの大型の皿である。142は瓦質土器の盤である。口縁端部が肥厚し、平坦な面をなす。口縁部の端部から内面にかけて漆が塗られている。143は白磁の皿である。無高台で、口ハゲである。

井戸3040から出土した遺物は、13世紀代（京都VI期中～VII期古）のものと考えられる。

流路3015（第24図、図版十八）

144は縄文土器の浅鉢である。口縁部外面に縄文ののちに二条の沈線を施し、体部外面と内面にはミガキを施す。胎土に金雲母が多く含まれる。縄文後期のものである。145は縄文土器片である。

流路3015からは、縄文土器のほか弥生土器の小片も出土している。

1面上包含層（第24図、図版十八）

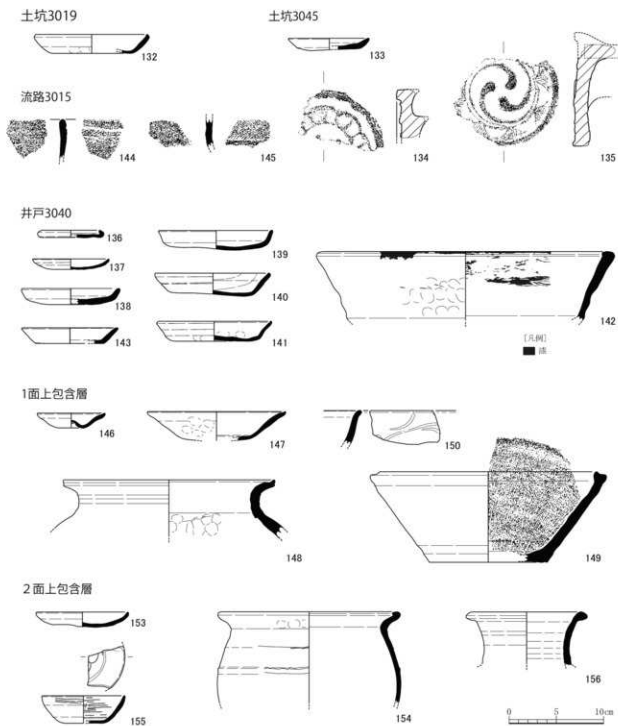
146・147は土師器の皿である。146はへそ皿で、底部外面の窪みに爪痕が残る。148は焼締陶器の甕である。口縁端部を上方につまみ上げる。外面に自然釉がかかる。常滑産か。149は焼締陶器の播鉢である。播り目は6条1単位である。150は青磁の碗である。外面に陰刻文を施す。151・152は銭貨である。151は至和元寶、152は寛永通寶である。（151・152は写真のみ）

1面上包含層からは、中世～近世の遺物が出土している。

2面上包含層（第24図、図版十八）

153は土師器の皿である。口縁部は短く立ち上がり、口縁端部は断面三角形形状を呈する。154は土師器の甕である。口縁端部は内側に巻き込むように折れる。体部外面に小さい突帯が巡る。体部内外面に煤が付着する。155は瓦器の輪花椀と思われる。無高台で、内面と口縁部外面に粗い平行状のミガキを施す。見込には菊花文と思われる暗文を描く。156は青磁の瓶である。口縁部は外折する。

2面上包含層からは平安時代前期～後期の遺物が出土している。



第24图 第3遺構面・包含層出土遺物実測図(縮尺1/4)

第5章 まとめ

本調査では主に平安時代後期の白河街区を中心とした遺構の変遷と、古地図に描かれた藩邸等の土地利用の有無を念頭において調査を行った。

この上で、成果として特筆すべきものは、調査地内の遺構の変遷、白河街区跡の区割りについて、山王社と聖護院の森の関係についての3点が挙げられる。

以下、各項目と合わせ、遺跡の各時代の特徴を合わせてまとめとする。

1. 各時代の遺構変遷

本調査で確認された遺構は、大きく分けて6期に分かれる。これに、堀内明博氏が分類した白河街区跡の変遷を併記し、考察につなげたい。

ただし、土師器等の編年と混同することを避けるため「白河Ⅰ期、白河Ⅱ期」と表記し、分類の都合上時期の追加を行った。(第5表)

以下、古い時代から順に記す

1. 縄文時代から弥生時代

(白河Ⅰ期：縄文時代～古墳時代)

調査区を南東から北西に横断する自然流路を確認した。

京都大学構内をはじめとして、岡崎地域では北東～南西方向への自然流路が数多く検出されており、平安時代前期まではその流路跡の起伏が凹地として残存していたことがわかっている。

当地で確認した流路は南東から北西にかけて0.2m弱の緩やかな落差が見られる。岡崎地域全体で見られるように地形に沿って東から西へ鴨川に向けて流れていたものと考えられる。

2. 平安時代中期から後期(白河Ⅳ～Ⅴ期：11世紀後半～12世紀前半)

平安時代中期(白河Ⅲ期)には白河の地に貴族の別業が盛んに営まれた後、法勝寺をはじめとした六勝寺など御願寺が相次いで建立され、平安京と同様に整然とした街区(白河街区)が整備された時期にあたる。白河街区内では、他に現在の聖護院川原町周辺から井戸群と多量の土器廃棄が認められる。

この時期に該当する遺構としては集中したピット群と南東部で確認した方形の土坑群である。土器溜などは確認できなかったが、方形の土坑は井戸である可能性も考えられる。ピット群については、明確に柱穴と判断できるものはないが、ピットの大きさや全体を見るとややぶれがあるが掘立柱建物が建っていた可能性もある。この中からは平安時代後期から鎌倉時代にかけての遺

第5表 白河・岡崎地区における時代変遷

区分	新区分	時代
I期	白河Ⅰ期	縄文時代～古墳時代
II期	白河Ⅱ期	飛鳥時代～奈良時代
III期	白河Ⅲ期	9世紀～11世紀中期 (平安時代前期～中期)
IV期	白河Ⅳ期	11世紀後半 (平安時代中期～後期)
V期	白河Ⅴ期	11世紀末～12世紀前半 (平安時代後期)
VI期	白河Ⅵ期	12世紀中～12世紀後半 (平安時代後期～末期)
VII期	白河Ⅶ期	12世紀末～13世紀初頭 (鎌倉時代初期)
VIII期	白河Ⅷ期	13世紀前半～14世紀中 (鎌倉時代前期～後期)
IX期	白河Ⅸ期	14世紀後半～16世紀後半 (室町時代・安土桃山時代)
	白河Ⅹ期	江戸時代

物が出土しており、長期にわたり建物が建っていた可能性が考えられる。

3. 平安時代後期から鎌倉時代前期（白河Ⅵ～Ⅶ期：12世紀中頃～13世紀初頃）

六勝寺だけでなく、その周辺の白河北殿・南殿などの別業やその北辺である大炊御門大路末、現在の聖護院円頓美町といった街区の北側に遺跡群が認められる時期である。なお、この時期の特筆事項として寺城内区画溝や、街区と合致しない大規模な溝が構築され、地割の再構成が想定される。この後、大地震で六勝寺伽藍の倒壊による方形区画に伴う溝への瓦などの大量廃棄などが認められる時期へ移行する。

本調査において区割りとみられる溝 2119 が確認されたのはこの時期である。ただし、遺物の埋没年代からの推定であるため造営時期についてはやや遡る可能性も考えられる。区割について、詳細は後述する。

4. 鎌倉時代後期（白河Ⅷ期：13世紀前半～14世紀中頃）

白河Ⅷ期に盛行した遺構群の消滅や尊勝寺域からの遺構が衰退する時期である。反面、聖護院川原町北部の井戸群が多くなるなど街区の北側へ遺構分布の中心が移動する。また、聖護院円頓美町と吉田近衛町は墓域へと発展する。

本調査で確認したこの時期の遺構は、不整形な南北方向にのびる土坑群と、溝 2085 が主体である。溝 2085 は、塀 1 や方形の土坑を壊す形で検出した。溝状のブランとして検出したが、土層や、重複した土坑の検出状況も合わせると、土坑が連続し溝状をなしていたものと考えられる。この土坑群は地山とする灰白色粘土（シルト質土）を掘り込み、鏝層まで掘りぬいていることから土取り穴である可能性もある。

5. 室町時代（白河Ⅸ期：14世紀後半～16世紀）

この時期、応仁の乱（1467～1477年）の戦禍以降、農地化が進む。中世以降、調査地周辺は熊野神社・聖護院の社域であり、「聖護院の森」といわれていた。

土坑 1030 のように炭化物と土器片が多く入る土坑を多数確認した。

集石遺構 1033 もこの時期に該当する。形状から墓域に関連するものの可能性がある。

溝 1040 と並行する石列 1054 もこの時期に分類できる。溝 1040 は下層の塀 1 直上に位置する。周りが土坑や溝であったのに対し、塀 1 の部分のみ硬化しており安定しやすかったためと考えられる。溝 1040 と石列 1054 の軸方向は共に N-3°-E であり、区画の意味を持つと考えられる。

なお、後述する山王社に井戸 1022 が関係する可能性もあるが、その他遺構からは当時の様相を伺うことができなかった。

6. 江戸時代（白河Ⅹ期）

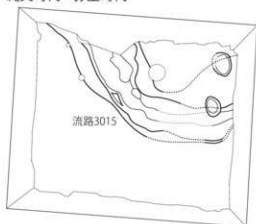
この時期の白河地区は聖護院村となっており、頂妙寺周辺の町人地に近接し耕作地として発展する。また、在地住民の他、文人たちの隠遁地として展開した。

さらに、幕末には 14 代将軍徳川家茂の上洛に伴い京屋敷の主要地区として使用された。

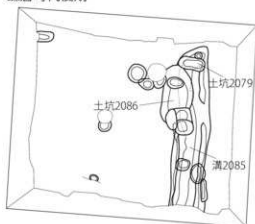
調査前は、古地図等より、彦根・井伊屋敷に関する遺構も想定したが実際に明言できる遺構は検出できなかった。

近世の遺構は、調査区北西側以外の全域から確認されている。主なものとしては集石遺構と、

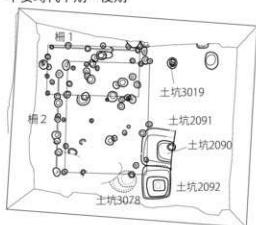
縄文時代～弥生時代



鎌倉時代後期



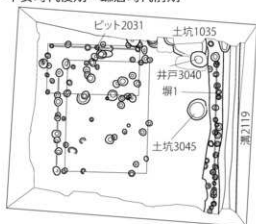
平安時代中期～後期



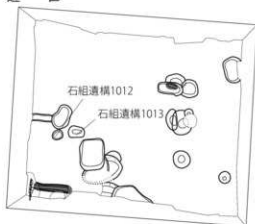
室町時代



平安時代後期～鎌倉時代前期



近世



第25図 主要遺構変遷図

溝群が挙げられる。個別遺構では挙げていないが南西部に集中する溝が一定の軸方向を持っている傾向があるのでまとめて記載する。

東西方向の溝（溝 1011・1042）はともに $W-5^{\circ}-N$ の軸を持つ。また、南北方向の石列 1055 は $N-5^{\circ}-E$ の軸を持つ。1042 と 1055 はともに埋土が焼土であり、近世に火災があったことを彷彿とさせる。石列は調査区外へ続いている、規則正しく並ぶ様子から建物もしくは区割りに関する遺構であると考えられる。



第 26 図 溝 1042・1055 検出状況（北から）

第 26 図 溝 1042・1055 検出状況（北から）

II . 白河街区の地割について

白河街区とは、白河殿と六勝寺を中心として、現在の岡崎付近一帯に平安時代後期（院政期）に開けた地域の総称である。寺院や邸宅が数多く建てられ、北は近衛通り、南は仁王門通、東は白川、西は鴨川付近を境界にして区域を限る。白川の地は、条坊制に区画された平安京の外京と考えられている。

1. 既往の地割研究

白河街区の地割についての研究は戦後本格化し、福山敏男は文献の再考と平安京の条坊を手がかりに復元を試み、その後発掘調査の結果から杉山信三が福山の復元案を修正、六勝寺の地割を提示した。1978 年、京都大学構内での大規模な発掘調査が始まり、その結果を元に岡田保良が造営尺を 0.3032 m として復元を行った。さらに、調査事例が増加するに及び、浜崎一志は全体の再検討を行った。そこで、字境界や古道を考慮し、南北道は四町おきに、東西道は二町おきに大路があり、平安京と同一形式を採用したと導き出した。また同年、杉山も従来発表した地割復元案を修正し、寺院規模や推定位置を改訂した。一方、宇野隆夫は吉田を含めた白河一体の寺院造営を主体とした開発が平安京の変質と密接に関わるだけでなく、その大きな画期となることを指摘した。また、上村和直は戦後発表された福山の復元案がほぼ妥当であるとし、造営尺は 0.301 ~ 0.303 m であるとしている。このほか、歴史学や文献史、建築史と言った観点からも院政期仏教と摂関期仏教との関連、その継承と相違についての論考が発表されている。

これら既往の研究を総括し、最新の地割復元案を提示しているのが堀内明博である。堀内は、発掘調査の成果を元に六勝寺造営に際して各寺院の敷地を平坦に地均しし、東の法勝寺から西の尊勝寺、さらに白河殿へと難壇状の地形が形成されていると指摘し、これらは明治時代岡崎で内国博覧会が開催される直前の写真でも確認できることから、この時期まで残存していたこととしている。この堀内の論考の後、京都市の委託を受け、(独) 国立文化財機構 奈良文化財研究所 文化遺産部景観研究室が京都岡崎の文化的景観の価値評価のため自然・歴史・地理的環境を総括した調査報告書を発行している。

2. 白河街区の地割と変遷

白河の中心に、東西のメインストリートである二条大路末があり、東の突き当たりには法勝寺がある。東西は二条大路末を中心とし、南北は仏所小路を境に、東側に六勝寺とその他寺院（得長寿院、聖護院、証菩提院、歡喜光院、金剛証院、福勝院）・神社（熊野神社、日吉神社）、西側に白河御所と御堂（白河南殿・蓮華藏院、白河北殿・宝荘藏院）が配される。その周辺に、宅地や雑舎、工房等があったと推定される。寺院や御所、御堂の規模は四町、二町、一町と様々である。

また、地割の方位についてはほぼ北で東に $0^{\circ} 30' \sim 0^{\circ} 50'$ ふれるとし、造営尺は $0.301 \sim 0.303$ mと考えられている。また、白河街区の地割施工時期は、文献や調査の結果からみても11世紀後半以後、法勝寺造営前後と考えられている。以前調査した尊勝寺阿彌陀堂の調査で、段丘状の地形に沿って水抜き溝を掘りこみ、その上に整地を行っていたが、埋土から平安時代後期以降の遺物しか出土しなかったことから、各寺院の建立前後に相応の整地をしておいてはならないかと考えられる。

さて、本調査で確認した区割り関連遺構としては塀1と溝2119が上げられる。これらの軸は $N-1^{\circ} 50'-E$ で、先述の基本軸 $N-0^{\circ} 30' \sim 0^{\circ} 50'-E$ よりも 1° 東に振れている。

先の既往研究を振り返ると、12世紀中頃～後半にかけて寺城内区画溝や街区と合致しない大規模な溝が構築され、地割の再編成を行ったと推定されている。町で区切っても当地には本来区割が通る場所ではないため、白河街区の地割の再構成を行った際の区画と考えられる。

これまで、先行研究と本調査を照合して溝と塀の関係性を考えたが、最後に現代の道路との関連についてまとめたい。

白河街区形成以後、12世紀中頃～後半の地割の再編成の後、六勝寺衰退と農村化、近世までの都市開発は白河街区由来の地割を踏襲し、新たな道路を通してのことから、現代においても未だ街区の痕跡は生きていて考えられる。

白河街区の特徴として、地割関連遺構と各寺院の建物の方位はほぼ一致するが、一町の規模と大きさが整然としておらず、大路・小路の規模、位置が不規則であり、東西道路に連続しないものがあり、不整合な箇所が多いことなどは以前から指摘されている。平地である平安京と違い、東山一帯の山脈がすぐ東にそびえ扇状地の地形はそのままに雑壇状の地形を形成したことから考えると、本来の地形にかなり影響を受けた区割りであったと想定できる。

3. 宝荘藏院の位置について

当地は聖護院山王町に位置するが、『京都坊目誌』の「聖護院町」の小字「山王」の項目に「中央に山王神社あり。大樹の松、生す。伝て宝荘藏院の旧蹟と云ふ」とある。宝荘藏院は長永元年（1132年）10月7日鳥羽上皇の護願寺として創建され、永久3年（1221年）4月17日焼失したとされる。山王社については後述するが、山王社のあった時代から考えると重複が起きること、また、宝荘藏院は白河殿の御堂であり、白河北殿と隣接すると言う記載が見られること、本調査で御堂に関する遺構が確認できなかったことから、聖護院山王町の中でも白河北殿寄り、今朱雀を挟んで西側に位置していたものではないかと考えられる。

III. 山王社と聖護院の森について

中世以降、調査地周辺は聖護院の寺域であった。聖護院の鎮守社である熊野神社の社域はとてども広大で、1町四方の境内があったともいい、境内南西に鬱蒼とした森が広がり、「聖護院の森」といわれていた（『山城名跡巡行志』）。紅葉が美しかったことから「錦林」という地名の由来ともなり、丸太町通の南北付近には、多くの梅の木が植えられ、花期には遊宴が催されたようである。

さて、調査前の当該地には地名である「聖護院山王町」の由来となった山王社を祭祀してあった。由緒や伝承をたどると、比叡山との関わりが強く、樹木については聖護院の森とも関係することから、近隣住民の方から聞いた伝承や周辺環境、遺構との関係について以下にまとめる。

1. 山王社の由来について

山王社とは、比叡山に静まる神を祀る、日吉大社の勧請をうけた神社を指す。

当地にあった社が祭祀された経緯については不明だが、親鸞上人が参詣のみぎり数珠のひもが切れ、落ちたカヤの数珠玉から芽吹いた（あるいは比叡山から六角堂へ日参祈禱の折、この櫃の木の下で一休みされて念珠の実をまかれた）と言われる櫃のご神木がそびえたち、井戸と水垢離場が設けられ、水垢離場は比叡山の僧侶が都より帰山する際に使用したと伝えられる。ご神木であったカヤの木は調査直前に伐採されたが、樹齢600年を超える大樹であったとのことで、中世の当地の面影を残していたといえよう。また、親鸞上人が比叡山へ登られる際、山王社へ参詣され杖を2本立てかけられた際にそこから木が生え、大杉と大イチョウになったとの伝承や、「京都の巨樹名木」（昭和13年発行）内に載っているカヤの木とエノキの木のうち、エノキの木は台風で倒れてしまったが、その幹のうちから大きな蛇があらわれてお祈りした、等の謂れも残っている。現在の社は調査前に聖護院門跡境内に遷座されており、扁額には天保年間の銘があることから、少なくとも170年以上前より再建されたものと考えられる。

京都地名語源辞典では、「山王社は江戸時代初期、天海による山王神道説が再形成され、諸国に山王日枝神社が作られた折、この地にも山王社が作られた」とあるが、伝承を信じるのであれば少々齟齬が生じる。

全体を総合すると、おそらく中世前半には山王社（日吉神社）が存在し、熊野神社や白河殿・聖護院の多くが焼失した応仁の乱の戦火に遭い、一時は廃絶もしくは衰退をしたものの山王信仰の再興と共に現在の社のような形で再建したというところではないだろうか。

当時から比叡山への登山口であったことや、近年まで比叡山の阿闍梨が多くの人と一緒に休憩される姿が見られたとのことであるから、京都と比叡山をつなぐ役割を担っていたのではないかと考えられる。

2. 聖護院の森の痕跡

調査時には、建物と庭木をすべて解体・伐採されていたためその全容は航空写真や絵図、聞き取り等の記録に頼るほかない。

記録によると、北から順に、櫃の木・オガタマの木が東西に並び、山王社と井戸があり、大銀杏の木、少し南に古い井戸、その後ろにも大銀杏の木があったとのことで、2008年時点の航空

写真にもその様子が確認できる（第27図、写真中央）。1面目の調査区東側は木の根の攪乱が多かったが、おそらく古くから根を張った、こうした木々の名残であろう。

調査地周辺の聖護院の森に関する樹木としては、熊野神社にはムクノキやモミ、ナギなどが、錦林小学校内にもケヤキやムクノキが残っている。絵図には松の高木もいくつか描かれており、文献には梅の名所、杉の木の記載もあることから、種類を問わず多くの樹木があり、全体に高木が多くあったことがうかがえる。



第27図 調査地周辺航空写真
(国土地理院 2008年撮影)

3. 山王社の痕跡

調査前にはすでに更地であったため、現地をみただけではその形跡は不明であったが、地域の方の話や写真記録等から、多くの情報を得ることができた。

そのうちのひとつが、井戸についてである。山王社の西側にあったという井戸は移築直前まで石の枠が残されていた。すでに空井戸となっており使われなくなって久しかったと聞くが、位置からすると本文で触れた井戸1022の位置であったようである。また、空井戸の井戸枠と類似の石枠が埋め込まれた井戸が、調査範囲外ではあったが調査区南側で確認できた。こちらは息抜きパイプが残っていたことから直近まで使用されていたものと考えられ、前項の大銀杏の間に位置する「少し古い井戸」に該当すると思われる。

記録にある水垢離場の痕跡については確認できておらず、井戸についても明確に祭祀に関するような遺物は確認できていない為、あくまで遺構と山王社の関係に関しては推測の域を出ない。

[参考・引用文献]

I. 各時代の遺構変遷

堀内明博 2009「白河街区における地割とその歴史の変遷」『日本古代都市史研究』思文閣出版

II. 白河街区の地割と変遷

石井明日香 2015「白河街区跡・尊勝寺跡・岡崎遺跡—集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—」株式会社イビソク

上村和直 1994「院政と白河」『平安京提要』角川書店

宇野隆夫 1979「鴨東の開発—平安京と京近郊—」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和53年度』京都大学埋蔵文化財研究センター

岡田保良 1979「京都大学構内遺跡と京・白河」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和53年度』京都大学埋蔵文化財研究センター

- 岡田保良 1980「平安時代鴨東白河の景観復原」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和54年度』
京都大学埋蔵文化財研究センター
- 清水重敦 2013「地形・地割の変遷」『京都岡崎の文化的景観調査報告書』独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所文化遺産部景観研究室編、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課
- 杉山信三 1961「尊勝寺発掘調査報告」『平城宮第一次、伝飛鳥板蓋宮跡発掘調査報告』
奈良国立文化財研究所学報第10冊
- 杉山信三 1981「院の御所と御堂—院家建築の研究」奈良国立文化財研究所学報第11冊、1962年
再録『院家建築の研究』吉川弘文館
- 杉山信三 1991『尊勝寺跡』京都市文化観光局
- 浜崎一志 1991「白河の条坊地割」『京都大学埋蔵文化財調査報告IV』京都大学埋蔵文化財研究
センター
- 浜崎一志 1994「都市空間の変遷に関する歴史的考察」京都大学
- 福山敏男 1943「六勝寺の位置について」(上)(二)『美術史学』第81・82号掲載後再録『日本建築史研究』
墨水書房、昭和四三年
- 堀内明博 2009「白河街区における地割とその歴史の変遷」『日本古代都市史研究』思文閣出版
- 京都市文化市民局 2007「京都市遺跡地図台帳【第8版】」
- Ⅲ、山王社と聖護院の森について
- 吉田金彦ほか 2013「京都地名語源辞典」東京堂出版
- 西尾充代 2007「聖護院つれづれ(一)」『聖護院だより No. 39』
- 木村和代 2007「榎(かや)の樹のこと」『聖護院だより No. 40』
- 本山修験宗聖護院門跡 2017「山王社復元事業のお知らせ」

第6表 出土遺物観察表

遺物番号	遺構番号	器種	器形	法量 (cm)			調物・成型		色調	備考
				口径	器高	底径	外面	内面		
1	集石遺構1033	土師器	皿	(6.4)	1.4	-	ヨコナダ、オサエ	ヨコナダ、ナゲ	2.538/2	灰白色
2	集石遺構1033	瓦質土器	鉢	(26.6)	[5.4]	-	ヨコナダ、ナゲ	ヨコナダ、ナゲ	2.534/1	黄灰色
3	集石遺構1033	白磁	皿	-	[2.6]	-	施釉	施釉	7.537/1	灰白色
4	集石遺構1033	白磁	四耳壺	-	[8.9]	-	施釉	施釉	1017/1	灰白色
5	集石遺構1033	瓦	軒丸瓦	高さ: [9.2]	-	厚さ: 2.1	オサエ、ナゲ	オサエ、ナゲ	M/	灰白色
6	土坑1005	土師器	皿	9.2	1.7	-	ヨコナダ、オサエ	ヨコナダ、ナゲ	7.5387/4	にぶい褐色
7	土坑1005	土師器	皿	14.6	2.4	-	ヨコナダ、オサエ	ヨコナダ、ナゲ	7.5387/4	にぶい褐色
8	土坑1017	土師器	皿	(11.0)	2.1	-	ヨコナダ、オサエ	ヨコナダ、ナゲ	7.5387/4	にぶい褐色
9	土坑1017	瓦質土器	壺	(44.8)	10.7	(33.8)	ヨコナダ、ナゲ、オサエ、キミ割敷	ヨコナダ	10185/2	灰黄褐色
10	土坑1030	土師器	皿	5.3	1.0	-	ヨコナダ、オサエ	ヨコナダ、ナゲ	10185/2	灰白色
11	土坑1030	土師器	皿	(11.6)	[2.6]	-	ヨコナダ、オサエ	ヨコナダ、ナゲ	10185/2	灰白色
12	土坑1030	土師器	皿	8.1	1.5	-	ヨコナダ、オサエ	ヨコナダ、ナゲ	7.5387/4	にぶい褐色
13	土坑1030	土師器	皿	8.6	1.3	-	ヨコナダ、オサエ	ヨコナダ、ナゲ	10188/3	浅黄褐色
14	土坑1030	土師器	皿	(11.6)	2.0	(7.0)	ヨコナダ、オサエ	ヨコナダ、ナゲ	7.5388/3	浅黄褐色
15	土坑1030	土師器	皿	(12.0)	[2.2]	(7.4)	ヨコナダ、オサエ	ヨコナダ、ナゲ	7.5387/6	褐色
16	土坑1030	瓦質土器	鉢	-	[4.5]	-	オサエ、ナゲ	ナゲ、ハケ目	N5/	灰白色
17	土坑1030	瓦質土器	片口鉢	(15.6)	[5.5]	(12.3)	ヨコナダ、ナゲ、オサエ、ハケ目	ヨコナダ	M/	灰白色
18	土坑1030	青白磁	壺	(6.0)	[1.0]	(8.0)	施釉	施釉	2.538/1	灰白色
19	土坑1030	白磁	蓋か	-	[0.8]	(6.0)	施釉、ロクロクズ目	施釉	537/2	灰白色
20	土坑1030	白磁	碗	-	[3.6]	-	施釉	施釉	2.538/1	灰白色
21	土坑1030	瓦	軒丸瓦	高さ: [3.9]	-	厚さ: 1.7	オサエ、ナゲ	7.5387/4	にぶい褐色	
22	土坑1030	瓦	軒丸瓦	高さ: 10.9	-	厚さ: 2.6	ナゲ	ナゲ	10187/3	にぶい黄褐色
23	土坑1035	土師器	皿	(8.8)	1.1	-	ヨコナダ、オサエ	ヨコナダ、ナゲ	7.5388/3	浅黄褐色
24	土坑1035	土師器	皿	(8.2)	1.1	(9.0)	ヨコナダ、オサエ	ヨコナダ	7.5387/6	褐色
25	土坑1035	土師器	皿	(9.6)	1.4	-	ヨコナダ、オサエ	ヨコナダ、ナゲ	7.5387/4	にぶい褐色
26	土坑1035	土師器	皿	(9.8)	1.7	-	ヨコナダ、オサエ	ヨコナダ、ナゲ	7.5387/4	にぶい褐色
27	土坑1035	土師器	皿	9.8	1.6	-	ヨコナダ、オサエ	ヨコナダ、ナゲ	7.5387/6	褐色
28	土坑1035	土師器	皿	(12.0)	2.6	-	ヨコナダ、オサエ	ヨコナダ、ナゲ	10188/3	浅黄褐色
29	土坑1035	土師器	皿	(14.0)	2.2	-	ヨコナダ、オサエ	ヨコナダ、ナゲ	7.5387/4	にぶい褐色
30	土坑1035	土師器	皿	(14.4)	2.8	-	ヨコナダ、オサエ	ヨコナダ、ナゲ	7.5387/4	にぶい褐色
31	土坑1035	白色土器	高坏	-	[2.1]	-	ヨコナダ、ナゲ	ヨコナダ、ナゲ	10188/2	灰白色
32	土坑1035	青磁	碗	-	[1.7]	5.1	施釉	施釉	567/1	明オリブ灰白色
33	土坑1035	焼締陶器	壺	(36.4)	[2.0]	-	ヨコナダ	ヨコナダ	3385/3	にぶい赤褐色
34	土坑1035	焼締陶器	壺	-	(10.9)	-	ナゲ、タタキ	ナゲ	3385/3	にぶい赤褐色
35	土坑1041	焼締陶器	壺	-	[3.9]	-	ロクロナゲ	ロクロナゲ、ナゲ	2.535/2	暗灰黄色
36	土坑1041	瓦	軒丸瓦	高さ: [5.1]	-	厚さ: 2.2	オサエ、ナゲ	10187/2	にぶい黄褐色	
37	井戸1022	土師器	皿	(10.0)	1.0	-	ヨコナダ、オサエ	ヨコナダ、ナゲ	10187/3	にぶい黄褐色
38	井戸1022	須恵器	鉢	-	[4.7]	-	ロクロナゲ	ロクロナゲ	N5/	灰白色
39	井戸1022	須恵器	高坏	-	[5.8]	-	ロクロナゲ、沈漉	ロクロナゲ、ナゲ	N5/	灰白色

遺物番号	遺構番号	器種	器形	法量 (cm)		調整・成型		色調	備考	
				口径	器高	底径	外面			内面
40	井戸 1022	瓦質土器	織	-	[5.0]	-	ヨコナダ、ナダ、オサエ	ヨコナダ、ハケ目	2.516/1 黄灰色	外面に煤付着 口縁部に重ね焼痕あり
41	柱六 1019	瓦器	碗	-	[2.9]	(3.4)	ミガキ、ヨコナダ、オサエ	ミガキ、ナダ	515/1 灰色	見込に暗文あり
42	石列 1054	土師器	皿	(9.6)	[1.5]	-	ヨコナダ、オサエ	ヨコナダ	10YK7/4 にぶい黄褐色	
43	石列 1054	土師器	皿	(13.2)	[2.2]	-	ヨコナダ、オサエ	ヨコナダ	7.51R7/4 にぶい褐色	
44	石列 1054	瓦質土器	織	-	[5.6]	-	ヨコナダ、ナダ、オサエ	ヨコナダ	2.517/1 灰白色	
45	6/例 1054	瓦質土器	羽釜	(18.8)	(8.3)	-	ヨコナダ、ナダ、オサエ	ヨコナダ、ハケ目	N5/ 灰色	
46	石列 1054	焼締陶器	甕	(22.8)	[7.4]	-	ヨコナダ、オサエ	ヨコナダ、ナダ、オサエ	7.51R4/2 灰褐色	常滑 内外面に自然釉がのびる
47	石列 1054	焼締陶器	甕	-	[8.0]	-	ナダ、押印文	ナダ	10K3/4 暗赤	
48	石列 1054	青磁	水注	-	[5.3]	-	輪軸	未調整	10G7/1 明緑灰色	
49	溝 1040	白色土器	高坏	(9.4)	[2.5]	-	ナダ、ケズリ	ナダ	10YR8/2 灰白色	
50	溝 1040	白磁	碗	-	[4.3]	-	輪軸、欄目文	輪軸	51R/1 灰白色	
51	溝 1040	石製品	硯	(7.6)	6.2	1.1	-	-	N3/ 暗灰色	
52	ピット 2031	軒平瓦	軒平瓦	高さ:5.2	幅:[9.1]	厚さ:1.4	ヨコナダ、ヘラナダ、タタキ、布目	ヘラナダ、タタキ	2.517/2 灰黄	
53	土坑 2001	土師器	皿	9.4	1.5	-	ヨコナダ、オサエ	ヨコナダ、ナダ	7.51R7/4 にぶい褐色	
54	土坑 2001	土師器	皿	9.6	1.7	-	ヨコナダ、オサエ	ヨコナダ、ナダ	10YR8/3 浅黄褐色	
55	土坑 2001	山茶碗	碗	-	[1.8]	(8.6)	ロクロナダ、ナダ	ロクロナダ	2.517/1 灰白色	
56	土坑 2001	焼締陶器	壺	-	[8.2]	(15.3)	ヨコナダ、ナダ	オサエ、ナダ	2.516/1 黄灰色	
57	土坑 2079	土師器	皿	8.1	1.5	-	ヨコナダ、オサエ	ヨコナダ、ナダ、ナダ上げ	51K7/6 褐色	
58	土坑 2079	瓦器	碗	(12.6)	3.4	(3.8)	ヨコナダ、ナダ、オサエ	ヨコナダ、ナダ、ミガキ	2.518/1 灰白色	
59	土坑 2079	須恵器	鉢	-	[3.9]	-	ロクロナダ	ロクロナダ、ナダ	N6/ 灰色	外面に重ね焼痕あり
60	土坑 2079	須恵器	甕	(24.2)	[6.7]	-	ヨコナダ、タタキ	ヨコナダ、ナダ、当て具痕	N7/ 灰白色	
61	土坑 2086	土師器	皿	-	[0.6]	(7.0)	ロクロナダ、ロクロヘラ、切り離し後ナダ	ロクロナダ、ナダ	10YR8/2 灰白色	ロクロ土師器か
62	土坑 2086	白色土器	皿	-	[1.3]	3.6	ロクロナダ 部転成切りナダ	ロクロナダ	2.518/1 灰白色	内外面に煤付着
63	土坑 2086	須恵器	甕	(28.2)	[10.9]	-	ヨコナダ、ハケ目後ヨコナダ、タタキ	ヨコナダ、当て具痕後ナダ	N 6/ 灰色	
64	土坑 2086	青磁	皿	-	[0.9]	(5.0)	輪軸、ケズリ	輪軸	10Y6/2 オリーブ灰色	器による文様 ジグザグ状の欄点線文
65	土坑 2086	青磁	鉢	-	[1.6]	-	輪軸	輪軸	10G7/1 明緑灰色	
66	土坑 2086	青磁	水注	-	[5.1]	-	輪軸	輪軸、ロクロナダ	7.517/1 灰白色	
67	土坑 2086	瓦	軒丸瓦	高さ: (13.2)	-	厚さ:2.9	ヨコナダ、ヘラナダ、ナダ、オサエ	ヘラナダ、ナダ、オサエ	N5/ 灰色	巴文
68	土坑 2086	石製品	硯石	高さ: (5.0)	幅:[7.2]	厚さ:1.0 ~1.2	加工痕	加工痕	10YR5/1 黄灰色	滑石製
69	土坑 2090	土師器	皿	(9.2)	1.2	-	ヨコナダ、オサエ	ヨコナダ、ナダ	7.51R7/4 にぶい褐色	
70	土坑 2090	土師器	皿	(9.6)	1.5	-	ヨコナダ、オサエ	ヨコナダ、ナダ	7.51R7/4 にぶい褐色	
71	土坑 2090	瓦質土器	甕	(39.8)	[10.1]	-	ヨコナダ	ミガキ、ヨコナダ、ナダ	N4/ 灰色	
72	土坑 2091	土師器	皿	9.2	1.8	-	ヨコナダ、オサエ	ヨコナダ、ナダ	7.51R7/4 にぶい褐色	
73	土坑 2091	土師器	皿	(15.6)	[2.3]	-	ヨコナダ、オサエ	ヨコナダ、ナダ	7.51R7/4 にぶい褐色	

遺物番号	遺構番号	器種	器形	法量 (cm)			調整・成型		色調	備考
				口径	器高	底径	外面	内面		
74	土坑 2091	白色土器	皿	(16.2)	3.5	6.9	ロクロナデ、 ロクロヘラ ケズリ、回 転車削り	ロクロナデ	10Y8/2 灰白色	高台内に墨書あり
75	土坑 2091	瓦器	碗	-	[2.2]	(5.4)	ミガキ、ヨ コナデ、ナ ゲ	ミガキ、ナ ゲ	M/ 灰色	見込に施文あり
76	土坑 2091	白磁	碗	(16.0)	[3.5]	-	旋軸	旋軸	10Y8/ 灰白色	輪花刺
77	土坑 2092	土師器	皿	(9.8)	[1.5]	-	ヨコナデ、 オサエ	ヨコナデ、 ナゲ	7.5Y7/4 にぶい褐色	
78	土坑 2092	土師器	皿	9.9	1.6	-	ヨコナデ、 オサエ	ヨコナデ、 ナゲ	7.5Y7/4 にぶい褐色	口縁部内面に煤付着
79	土坑 2092	土師器	皿	(14.0)	2.6	-	ヨコナデ、 オサエ	ヨコナデ、 ナゲ	10Y7/3 にぶい黄褐色	口縁部に煤付着
80	土坑 2092	土師器	皿	(14.6)	[2.6]	-	ヨコナデ、 オサエ	ヨコナデ、 ナゲ	7.5Y7/4 にぶい褐色	
81	土坑 2092	土師器	壺	(18.6)	[6.1]	-	ヨコナデ、 ナゲ、オサ エ	ヨコナデ、 ナゲ、工具 オサエ	5Y7/6 褐色	
82	溝 2085	土師器	皿	5.2	0.8	-	ヨコナデ、 オサエ	ヨコナデ、 ナゲ	10Y8/3 浅黄褐色	内外面に墨書あり
83	溝 2085	土師器	皿	7.4	1.8	3.8	ヨコナデ、 オサエ	ヨコナデ、 ナゲ	10Y8/2 灰白色	
84	溝 2085	土師器	皿	12.6	2.9	-	ヨコナデ、 オサエ	ヨコナデ、 ナゲ	10Y8/1 灰白色	
85	溝 2085	土師器	皿	(8.6)	1.1	-	ヨコナデ、 オサエ	ヨコナデ、 ナゲ	7.5Y7/4 にぶい褐色	口縁部内面に一部煤付 着
86	溝 2085	土師器	皿	(10.8)	1.9	-	ヨコナデ、 オサエ	ヨコナデ、 ナゲ	7.5Y7/6 褐色	
87	溝 2085	土師器	皿	11.6	2.3	-	ヨコナデ、 オサエ	ヨコナデ、 ナゲ	10Y8/4 浅黄褐色	外面底部に板状凹痕
88	溝 2085	土師器	羽釜	13.5	5.8	(4.6)	ナゲ	ナゲ	7.5Y8/3 浅黄褐色	外面に煤付着
89	溝 2085	瓦器	碗	(7.6)	2.3	2.7	ヨコナデ、 ナゲ、オサ エ	ミガキ、ヨ コナデ、オ サエ	M/ 灰色	
90	溝 2085	瓦器	碗	(10.2)	[2.8]	(7.0)	ミガキ、ナ ゲ	ミガキ	M/ 灰色	輪花刺か
91	溝 2085	瓦器	碗文	[14.0]	[3.9]	-	ヨコナデ、 ナゲ、オサ エ	ヨコナデ	M/ 暗灰色	内面に施文あり
92	溝 2085	瓦器	碗	-	[0.4]	-	ナゲ、オサ エ	ヨコナデ	7.5Y5/1 灰色	内面見込に菊花文の刺 文あり
93	溝 2085	瓦質土器	碗	(14.4)	[4.6]	-	ヨコナデ ナゲ、オサ エ	ヨコナデ、 ナゲ	M/ 灰白色	外面に煤付着
94	溝 2085	須恵器	鉢	-	[6.7]	-	ロクロナデ、 工具ナゲ	ロクロナデ、 工具ナゲ	7.5Y3/1 オリーブ黒色	外面に重ね焼痕あり
95	溝 2085	須恵器	壺	(34.0)	[9.3]	-	ヨコナデ、 タタキ	ヨコナデ、 ナゲ	10Y8/2 灰黄褐色	
96	溝 2085	山菜碗	鉢	-	[4.7]	-	ロクロナデ	ロクロナデ	M/ 灰白色	常滑産
97	溝 2085	陶器	鉢	(28.8)	[6.2]	-	ロクロナデ	ロクロナデ	2.5Y6/1 黄灰色	外面に重ね焼痕か
98	溝 2085	陶器	壺	-	[5.8]	-	ロクロナデ	ロクロナデ	2.5Y8/1 灰白色	
99	溝 2085	焼結陶器	四耳壺	-	[10.7]	-	ヨコナデ、 ナゲ、沈線、 押印文	オサエ最ナ ゲ	7.5Y8/3 にぶい褐色	
100	溝 2085	焼結陶器	壺	(43.6)	[45.5]	-	ナゲ、ヨコ ナデ	ナゲ、ヨコ ナデ	10 Y 8/2 オリーブ灰色 5 Y R 4/8 赤褐色	塗付着
101	溝 2085	焼結陶器	壺	-	[24.5]	17.8	ハケ後ナゲ、 一部オサエ	ハケ後ナゲ、 一部オサエ	2.5 Y R 4/4 にぶい赤 褐色	内外面に自然釉がらみ る
102	溝 2085	青磁	碗	(12.4)	[4.4]	-	旋軸	旋軸	5Y7/5/1 オリーブ灰色	連弁文
103	溝 2085	青磁	皿	-	[2.9]	-	旋軸	旋軸	5Y6/1 オリーブ灰色	
104	溝 2085	瓦	軒平瓦	高さ:6.0	-	厚さ: (4.5)	ヘラケズリ、 春日煎	ナゲ	2.5Y8/6 明赤褐	丹波産か、均整唐草文
105	溝 2085	瓦	軒丸瓦	高さ: (6.1)	幅: [7.6]	厚さ: 2.1	工具ナゲ、 ナゲ	ナゲ	2.5Y7/1 灰白色	蓮華文
106	溝 2085	瓦	軒丸瓦	高さ: 11.8	-	厚さ: 2.0	-	ケズリ、オ サエ、ナゲ	M/ 灰色	連弁六葉蓮華文 山城産
107	溝 2085	瓦	軒丸瓦	高さ: [11.0]	-	厚さ: 2.9	-	オサエ、ナ ゲ	M/ 暗灰色	連弁八葉蓮華文
108	溝 2085	瓦	軒丸瓦	高さ: (9.9)	幅: [5.7]	厚さ: (3.4)	ナゲ	ナゲ	M/ 灰色	
109	溝 2085	瓦	軒丸瓦	高さ: (14.2)	幅: [5.2]	厚さ: 2.0	ヘラナゲ	ヘラナゲ、 ナゲ	M/ 灰色	
110	溝 2085	石製品	石罨	(27.8)	[7.3]	-	ノミ痕	横方向の研 磨痕	2.5Y7/2 灰黄色	内面に被焼痕

遺物番号	遺構番号	器種	器形	法量 (cm)		調整・成型		色調	備考	
				口径	器高	底径	外面			内面
111	溝 2065	石製品	石鏃	-	[13.1]	10.1	ノミ痕	-	10YR6/1 褐色	外面に煤付着
112	溝 2119	土師器	皿	8.4	1.3	-	ヨコナデ, オサエ	ヨコナデ, ナデ	7.5YR7/4 にぶい褐色	
113	溝 2119	土師器	皿	(13.0)	1.9	(9.6)	ヨコナデ, オサエ	ヨコナデ, ナデ, オサエ	7.5YR7/6 褐色	底部外面に板状圧痕
114	溝 2119	白色土器	皿	(17.4)	[2.7]	-	ロクロナデ, ナデ, オサエ	ロクロナデ, ナデ	10YR8/2 灰白色	
115	溝 2119	白色土器	高坏	-	[6.9]	-	ヘラケズリ	未調整	10YR8/2 灰白色	
116	溝 2119	瓦器	小碗	7.6	2.5	3.2	ヨコナデ, ナデ, オサエ	ミガキ, ヨ コナデ, ナ デ	M/ 灰色	
117	溝 2119	瓦器	碗	(13.2)	[2.8]	-	ナデ, オサ エ	ミガキ, ナ デ	M/ 灰色	
118	溝 2119	瓦質土器	鉢	(28.0)	[4.9]	-	ナデ, オサ エ, 工具痕	ヨコナデ, ナデ, ヘク 目	X3/ 暗灰色	外面に煤付着 敷ね地痕あり
119	溝 2119	須恵器	鉢	(19.5)	7.6	(10.0)	ロクロナデ, ナデ, オサ エ	ロクロナデ	S7/ 灰白色	東播系
120	溝 2119	須恵器	壺	(20.5)	[4.3]	-	ヨコナデ, タタキ	ヨコナデ, ナデ	2.5Y4/2 暗黄褐色	
121	溝 2119	山形網	片口小 皿	8.0	1.9	4.0	ロクロナデ, ナデ, 回転 金切り	ロクロナデ	2.5Y6/1 黄褐色	
122	溝 2119	地物陶器	大平鉢	-	[6.3]	(15.5)	ケズリ, ロ クロナデ, ナデ	ナデ	素地: 7.5Y7/1 灰白色	常滑産
123	溝 2119	白磁	碗	(14.4)	[4.3]	-	筋轆	筋轆	7.5YR/1 灰白色	
124	溝 2119	白磁	蓋	1.3	1.1	受部径: 2.9	筋轆	ナデ	10YR/ 灰白色	
125	溝 2119	瓦	軒丸瓦	高さ: (3.9)	-	厚さ: (4.5)	ナデ	ナデ	M/ 灰色	
126	溝 2119	瓦	軒平瓦	高さ: (4.1)	幅:[5.1]	厚さ:1.7	ナデ	布目痕	5YR/1 灰白色	播磨産 折曲げ技法
127	溝 2119	瓦	軒平瓦	高さ: (5.2)	幅:[7.7]	厚さ:1.7	布目痕, ヘ ラケズリ	ヘラナデ, 縄目後ナデ	M/ 灰色	播磨産 折曲げ技法
128	溝 2119	瓦	軒平瓦	高さ: (4.5)	-	厚さ: (4.0)	横方向のナ デ, 縦方向 のナデ	横方向のナ デ, 縦方向 のナデ	M/ 灰色	播磨産
129	溝 2119	石製品	円盤状 石製品	長さ:5.0	幅:[4.4]	厚さ:0.9	-	-	M/ 灰色	重さ:32.65 g
130	住穴 2007	瓦質土器	鉢	(22.6)	[7.5]	-	ヨコナデ, ナデ, オサ エ	ヨコナデ, ナデ, ヘク 目	M/ 灰色 5Y7/1 灰白色 10YR4/1 褐色	外面に煤付着
131	住穴 2008	須恵器または 地物陶器	鉢	-	[4.9]	(15.2)	ナデ	ナデ	5YR6/1 黄褐色 2.5YR5.6 明赤褐色	
132	土坑 3019	土師器	皿	(12.2)	2.9	-	ヨコナデ, オサエ	ヨコナデ, ナデ	10YR8/3 浅黄褐色	
133	土坑 3045	土師器	皿	8.5	1.3	-	ヨコナデ, オサエ	ヨコナデ, ナデ	10YR7/3 にぶい黄褐色	
134	土坑 3045	瓦	軒丸瓦	高さ: (5.1)	幅:[3.0]	-	ナデ	ナデ, オサ エ	M/ 灰色	
135	土坑 3045	瓦	軒丸瓦	高さ: (10.6)	幅:[4.5]	厚さ:1.4	ヘラナデ	ナデ, オサ エ	M/ 灰色	巴文
136	井戸 3040	土師器	皿	(7.0)	9.8	-	ヨコナデ, オサエ	ヨコナデ, オサエ	2.5YR/2 灰白色	
137	井戸 3040	土師器	皿	8.1	1.1	-	ヨコナデ, オサエ	ヨコナデ, ナデ	10YR7/2 にぶい黄褐色	
138	井戸 3040	土師器	皿	(10.4)	1.7	-	ヨコナデ, オサエ	ヨコナデ, ナデ	10YR7/3 にぶい黄褐色	
139	井戸 3040	土師器	皿	12.1	2.1	-	ヨコナデ, オサエ	ヨコナデ, ナデ	10YR8/3 浅黄褐色	
140	井戸 3040	土師器	皿	12.2	2.4	-	ヨコナデ, オサエ	ヨコナデ, ナデ	10YR7/4 にぶい黄褐色	
141	井戸 3040	土師器	皿	12.2	2.1	-	ヨコナデ, オサエ	ヨコナデ, ナデ	7.5YR8/4 浅黄褐色	
142	井戸 3040	瓦質土器	壺	(31.6)	[7.3]	(25.9)	ヨコナデ, ナデ, オサ エ, モミ殻 痕	ヨコナデ, ナデ	2.5Y7/2 灰黄色	口縁部に煤付着
143	井戸 3040	白磁	皿	(10.2)	1.6	(7.2)	筋轆	筋轆	7.5Y7/1 灰白色	
144	成路 3015	縄文土器	鉢	-	[4.1]	-	ミガキ, 沈 澱, 縄文	ミガキ	10YR6/2 灰黄褐色	
145	成路 3015	縄文土器	-	-	[2.9]	-	染紙, ナデ	ミガキ	10YR8/2 灰白色	
146	I面上 区含層	土師器	皿	7.2	1.6	-	ヨコナデ, オサエ	ヨコナデ, ナデ	10YR8/4 浅黄褐色	外面に泥痕あり
147	I面上 区含層	土師器	皿	(14.6)	[3.1]	-	ヨコナデ, オサエ	ヨコナデ	7.5YR8/4 浅黄褐色	

遺物番号	遺構番号	器種	器形	法量 (cm)			調整・成型		色調	備考
				口径	器高	底径	外面	内面		
148	1面上 包含層	焼酎陶器	甕	(22.0)	[6.0]	-	ヨコナダ	ヨコナダ、 ナダ、オサ エ	10K3/4 暗赤色	
149	1面上 包含層	焼酎陶器	播鉢	(25.0)	9.6	(12.4)	ロクロナダ、 ナダ	ロクロナダ、 ナダ 環目	2.5YR5/3 に近い赤褐色	
150	1面上 包含層	青磁	瓶	-	[3.5]	-	旋軸	旋軸	5Y7/1 明オリーブ灰 色	
151	1面上 包含層	金属製品	鉄貨	最大径： 2.5	厚さ： 1.2mm	-	-	-	10Y6/1 灰色	至和元寶
152	1面上 包含層	金属製品	鉄貨	最大径： 2.35	厚さ： 1.2mm	-	-	-	10Y4/1 灰色	寛永通寶
153	2面上 包含層	土師器	皿	9.8	1.6	-	ヨコナダ、 オサエ	ヨコナダ、 ナダ	5YK7/6 褐色	
154	2面上 包含層	土師器	甕	(19.2)	[9.7]	-	ヨコナダ、 オサエ	ヨコナダ、 ナダ	7.5YR5/3 に近い褐色	内外面に煤付着
155	2面上 包含層	瓦器	小碗	(8.8)	2.9	(3.9)	ミガキ、ヨ コナダ、オ サエ	ミガキ、ヨ コナダ	2.5YR/1 灰白色	見込に贈文あり
156	2面上 包含層	青磁	瓶	(12.8)	[5.5]	-	旋軸	旋軸	2.5Y7/1 灰白色	

写 真 图 版



1. 第1遺構面全景 (南から)



2. 罫1検出 (西から)



3. 土坑1005遺物出土状況 (南から)



4. 土坑1017遺物出土状況 (西から)



1. 溝 1040、石列 1054 完掘 (南から)



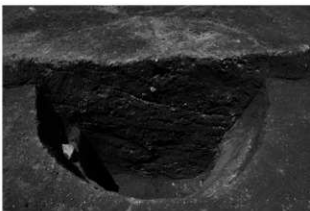
2. 集石遺構 1012 断面 (東から)



3. 集石遺構 1033 検出 (東から)



4. 集石遺構 1013 断面 (東から)



5. 井戸 1022 断面 (東から)



1. 第2遺構面全景（南から）



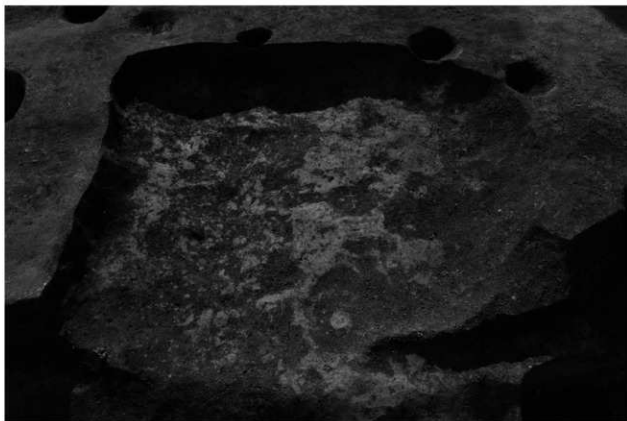
2. 土坑 2031 遺物出土状況（北から）



1. 土坑 2079 遺物出土状況 (北から)



2. 土坑 2086 下層 集石検出 (南から)



1. 土坑 2091 完掘 (東から)



2. 土坑 2092 完掘 (北から)



1. 溝 2085 完掘 (北から)



2. 溝 2119 完掘 (南から)



1. 溝 2085・2119、堀 1 完掘 (南から)



2. 堀 2 完掘 (南から)



1. 第3遺構面全景 (南から)



2. 土坑 3019 断面 (南から)



1. 土坑 3045 完掘 (西から)



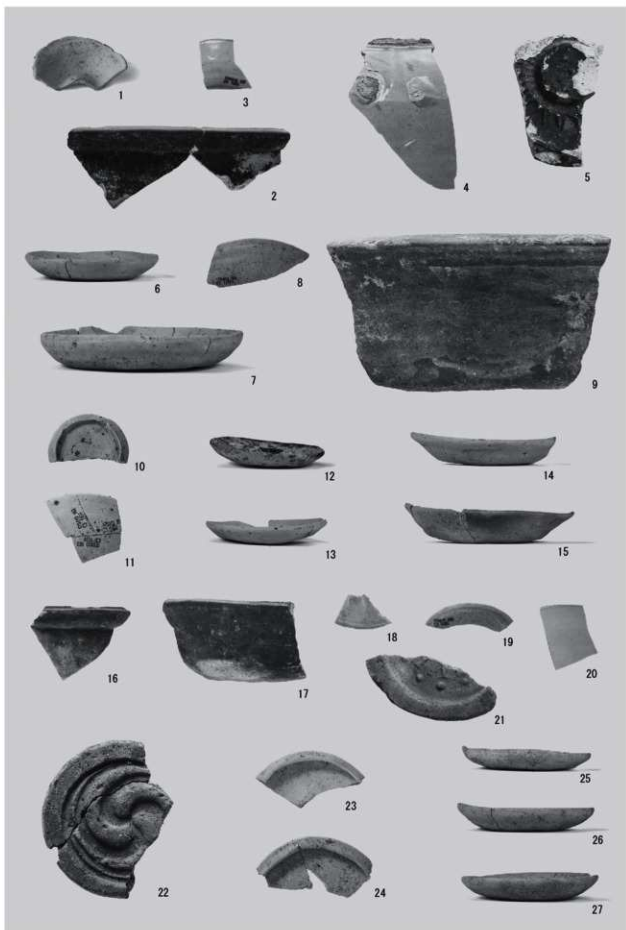
2. 土坑 3078 完掘 (南西から)



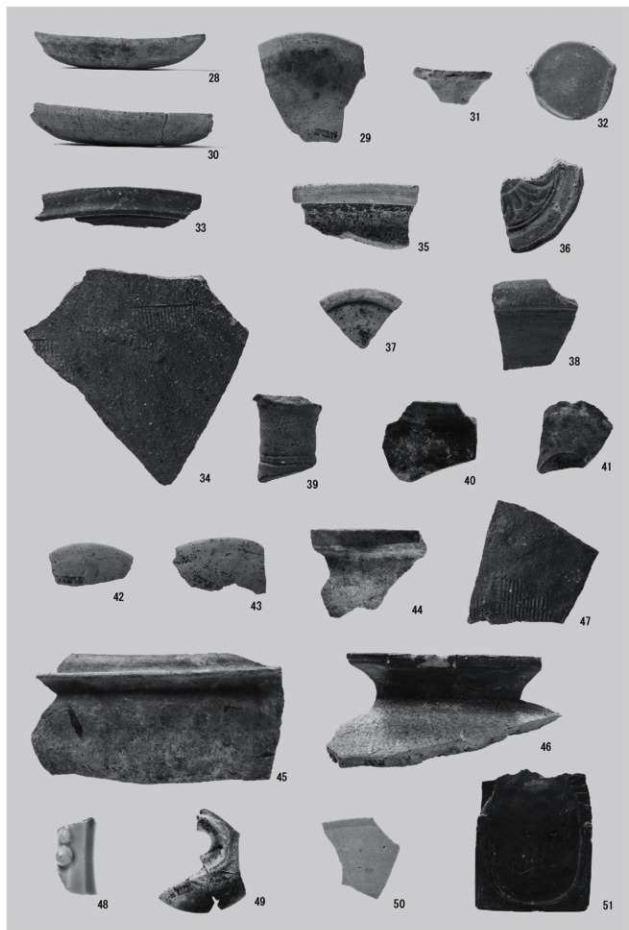
1. 井戸 3040 完掘 (西から)



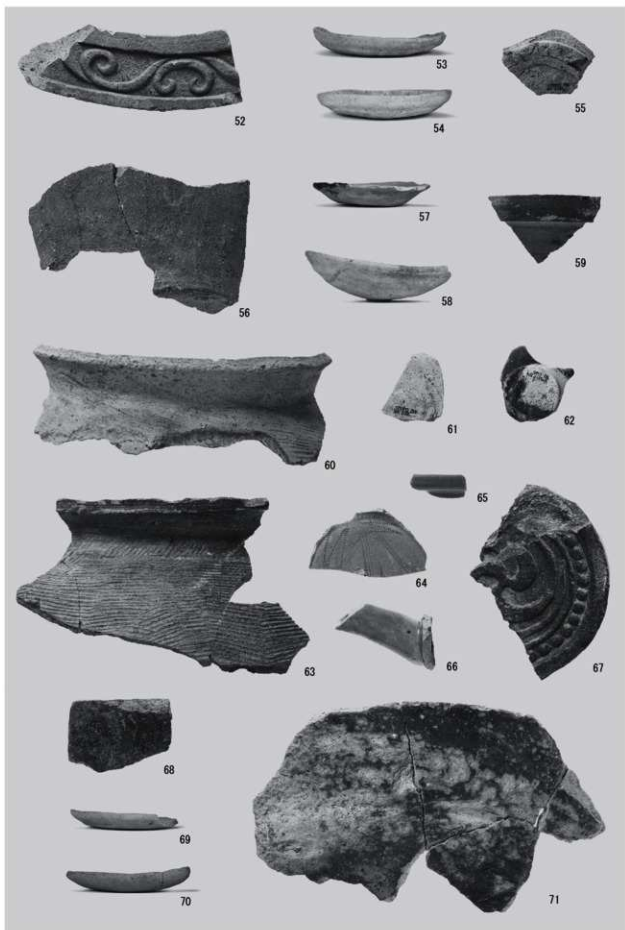
2. 流路 3015 (北西から)



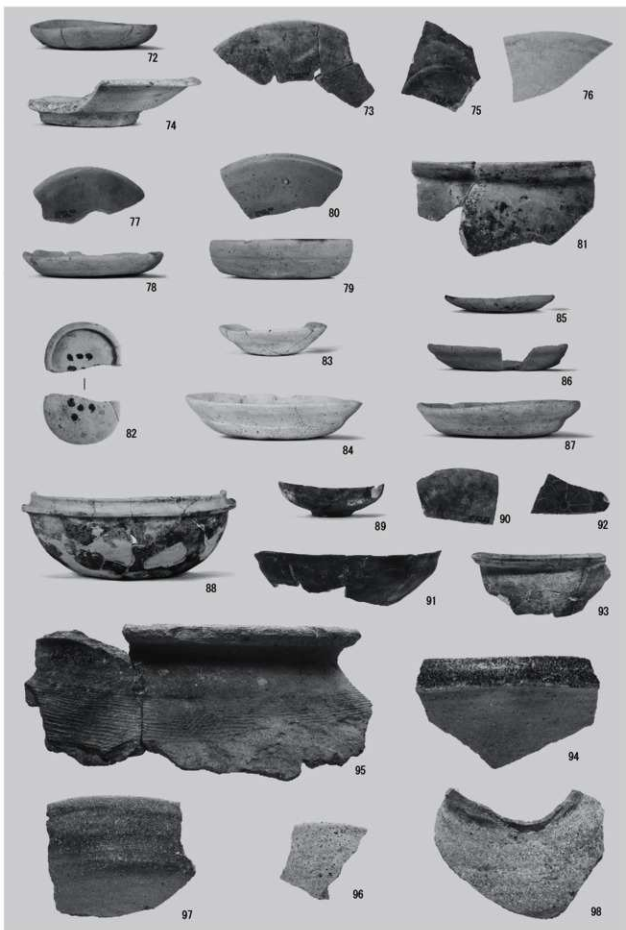
1. 第1遺構面出土遺物 1



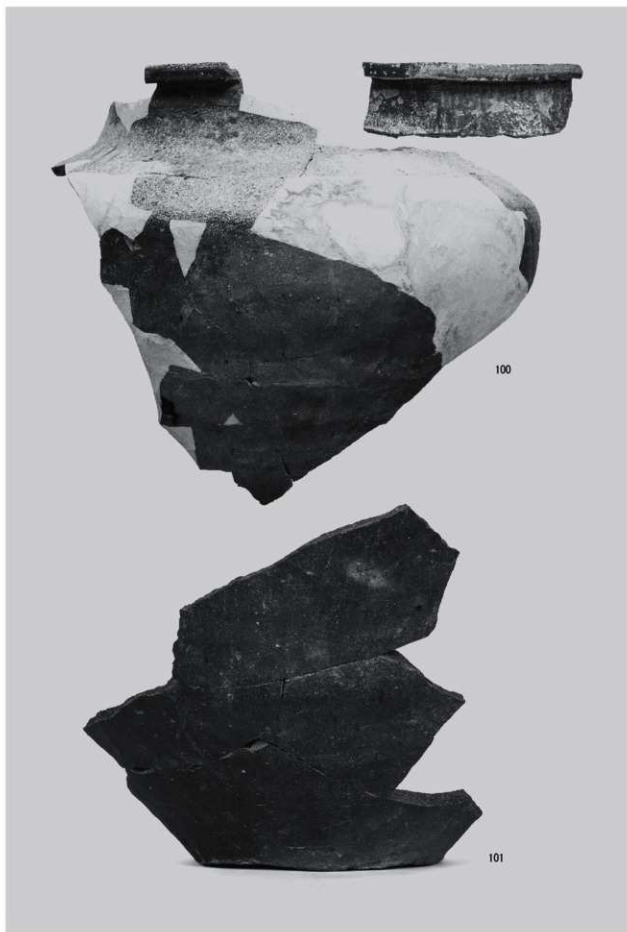
1. 第1遺構面出土遺物 2



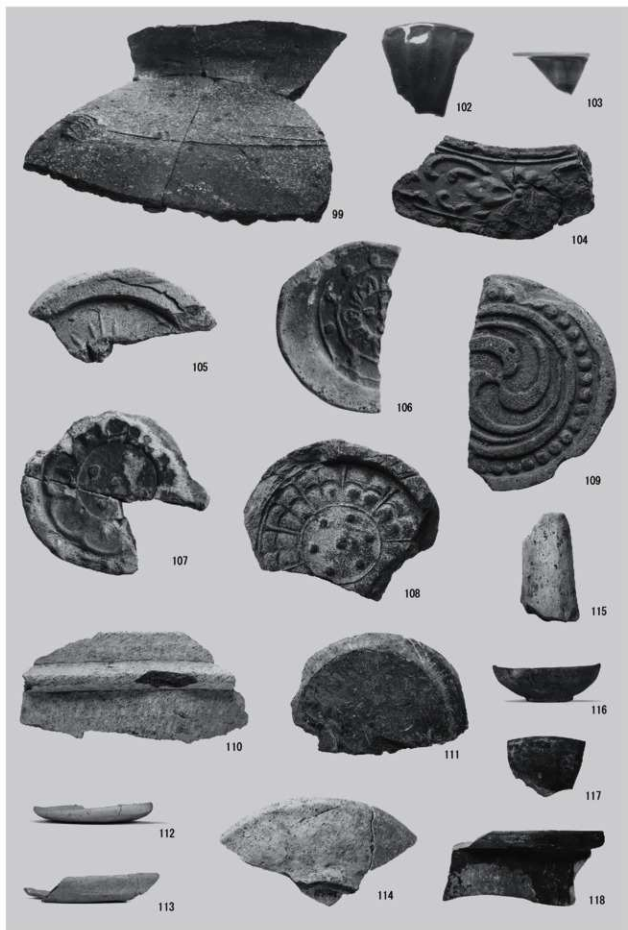
3. 第2遺構面出土遺物 1



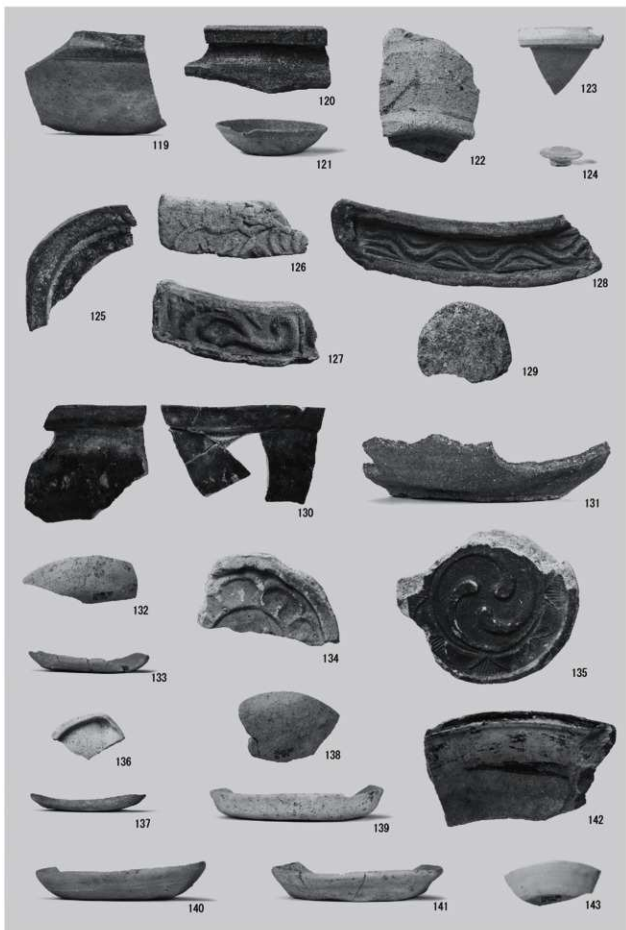
1. 第2遺構面出土遺物2



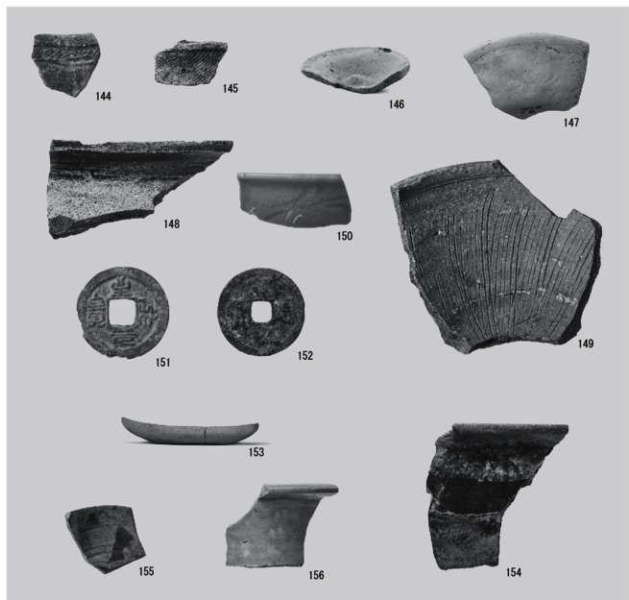
1. 第2遺構面出土遺物3



1. 第2遺構面出土遺物 4



1. 第2・第3遺構面出土遺物



1. 包含層出土遺物

報告書抄録

ふりがな	しらかわがいくあと
書名	白河街区跡
副書名	聖護院山王町における埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	イビソク京都市内遺跡調査報告
シリーズ番号	第18輯
編著者名	石井明日香、小池智美
編集機関	株式会社イビソク
所在地	〒612-8425 京都府京都市伏見区竹田中殿町86番地 TEL.075-632-8109
発行年月日	2018年12月

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
白河街区跡	京都市左京区 聖護院山王町 5ほか	26103	417	35° 01′ 05″	135° 46′ 45″	20170703) 20170905	304㎡	集合住宅 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
白河街区跡	寺院跡 邸宅跡	中世～近世	溝・櫓・土坑・ピット	土師器、須恵器、瓦質土器、陶磁器、瓦	
		平安時代後期～鎌倉時代	溝・櫓・櫓・井戸・土坑・ピット	土師器、須恵器、瓦質土器、陶磁器、瓦、石製品	
		縄文時代～古墳時代	流路	縄文土器、弥生土器	
要約	<p>3面の遺構面（中世・近世、平安時代後期～鎌倉時代、平安時代後期、縄文時代～弥生時代）を検出した。主な遺構としては、近世の石組み遺構、中世の井戸、平安時代後期から中世にかけての区画溝とそれに伴う櫓・柱穴、縄文時代～古墳時代の流路などを検出した。</p> <p>遺物は、土師器皿、東播系須恵器、瓦、焼締陶器、瓦質土器を中心に出土した。</p>				

白河街区跡

—泉護院山王町における埋蔵文化財発掘調査報告書—

発行日 2018年12月

編集
発行 株式会社イビソク

住所 京都府京都市伏見区竹田中殿町8番地
〒612-8425 TEL 075-632-8109

印刷 富士出版印刷株式会社

